

千葉大学工学同窓会々報 41

2014



工学系総合研究棟2と自然科学系総合研究棟2のツインタワー

建築学科
都市環境システム学科
デザイン学科
機械工学科
メディカルシステム工学科
電気電子工学科
ナノサイエンス学科
共生応用化学科
画像科学科
情報画像学科

【目次】

- 1 工学同窓会会長挨拶
- 2 工学部長挨拶
- 3～4 建築学科（Ⅱ部会：木材・建築・デザイン工学科建築系）
- 5～6 都市環境システム学科（X部会：都市環境システム）
- 7～8 デザイン学科（Ⅰ部会：図案・彫刻・造形・意匠・デザイン工学科意匠系）
- 9～10 機械工学科（Ⅲ部会：金属・精機・機械・機械第二・電子機械工学科機械系）
- 11～12 メディカルシステム工学科（XI部会：メディカルシステム）
- 13～14 電気電子工学科（Ⅳ部会：電気・電子・電気電子・電子機械工学科電気電子系）
- 15 ナノサイエンス学科（XII部会：ナノサイエンス）
- 16～18 共生応用化学科（Ⅴ・Ⅸ部会：工業化学・合成化学・応用化学・機能材料工学・物質工学）
- 19～21 画像科学科（Ⅵ・Ⅶ部会：写真・印刷・画像・画像応用・情報画像工学科画像系）
情報画像学科（Ⅷ部会：情報・情報画像工学科情報系）
- 22～23 高潮展、凡展、松芸展、アーカイブス
- 24 平成25年度工学同窓会事業報告
- 25～28 寄付者一覧
- 29 次世代モビリティパワーソース研究センター竣工記念式典
- 30 工学同窓会による学生支援

千葉大学工学同窓会

ホームページ <http://chiba-kougaku-dosokai.jp/>



会長挨拶

工学同窓会会長 塩田孝夫 TAKAO SHIOTA

生年月日／昭和25年2月16日
出生地／東京都
卒業年度／昭和47年千葉大学工学部工業化学科卒業

日頃の工学同窓会活動へのご理解、ご支援ありがとうございます。あらためて工学同窓会の規約を見ますと、同窓会の活動目的は会則には“本会は会員相互の親交を図り、合わせて斯界への発展に寄与するところを目的とする”と定められています。会員相互の親睦を図りは文字通り解釈がいらないのですが、斯界への発展に寄与するところの解釈が難しいところです。工学に関する学術的、社会的課題に対し同窓会も何かのことをしなさいということだと思料します。

学生さんの課外の科学技術に資する活動には頑張れと声を出すだけではなく、一部ですが資金的援助も行っており、工学同窓会として今年是一部団体の活動に対する表彰も行っております。フォーミュラ、ソーラーデカスロン、ロボコン等主体的に人、物、金を管理して行う活動は学生さんの自律意識を育て、大学社会以外のステークホルダーとの接触によりその後の活動の幅を大きく広げることができると考えられます。また、図書、書類を中心とする工学同窓会アーカイブ、歴史的な機材を集めた工学部展示室の展示物は科学技術の発展の歴史を探る上で重要であり、また、青少年層の科学に対する興味を呼び起し、工学的発想の源を理解する意味でも生きた教材として展示することに価値があります。これらについても工学同窓会の寄与が必要と考えております。

同窓会活動は基本的には教職員の皆様のボランティア活動で成り立っています。各部会、及び、職種別に会報、名簿、HP、アーカイブ委員会に分かれ活動し

て頂いています。同窓会長として幹事会に出席し、工学同窓会に関係する先生方にはご苦勞を掛けていることがわかりました。一方、現在の国立大学は予算的に毎年厳しさが増えています。これは、国家予算のこれからを考えると更に厳しくなることが予想されます。その中でも、世界の中での相対的な評価を上げるために教育体制を刷新し、また引き続き研究成果をあげることが期待されています。この中で、各分野で大変なご努力をされていると思いますと、同窓会に関係する先生方のご負担を和らげることを考えてゆく必要があります。

私事ですが、本年6月から会社の経営から離れ落ち着いて環境を眺めることになりました。現在はあらゆる分野で技術的な変革が起こる時期に入ってきていると考えられます。地球温暖化は科学技術を結集して抑えなければなりません。計算能力の人間の脳の能力に対する超越、半導体のムーアの法則の限界、自動運転をはじめとするロボット技術の意識しない中での社会への浸透、量子力学の素子、演算、通信への応用、また、生体細胞操作等これからの20年で技術全体の様相が変わる可能性がある技術課題が多数あります。一方、人口減少は生産関数のマイナス要素で、また、生産性の向上は先進国ではあまり望めません。但し、技術課題の達成は生産性を伸ばし国内のGDPの減少を和らげることが期待できます。この中で同窓の一員として千葉大学工学部が、また、卒業生の皆様が斯界の発展に寄与されることを祈念しております。

経歴

昭和47年3月 千葉大学工学部工業化学科卒業
昭和48年3月 藤倉電線株式会社（現フジクラ）入社
平成3年4月 Fujikura Technology America Corp.社長
平成9年7月 株式会社 フジクラ 開発企画部長
平成19年6月 株式会社 フジクラ 常務取締役
平成21年6月 株式会社 フジクラ 常勤監査役
平成26年6月 株式会社 フジクラ 研究開発顧問
現在に至る



ご挨拶

千葉大学工学部長 北村彰英 AKIHIDE KITAMURA

生年月日／昭和24年9月23日

出生地／東京都目黒区

卒業年度／昭和49年東北大学理学部化学科卒業

昭和55年筑波大学大学院博士課程化学専攻修了
理学博士（筑波大学）

同窓生の皆様方にはご健勝で、またご活躍されていることと思います。

日本では現在、長年にわたるデフレから脱却し、新たな成長を遂げるべく様々な施策が打ち出されています。その中で大学の強化、大学教育の在り方などが強く言われるようになってきています。たとえば、昨年2月の内閣総理大臣の施政方針演説には次のようなくだりがありました。「大学力」は国力そのものです。大学の強化なくして、我が国の発展はありません。世界トップレベルとなるよう、大学の在り方を見直します（以下略）。いままで、施政方針演説で大学に言及したことはなかったそうです。それだけ大学の在り方が注目されており、また大学改革が望まれているということです。

また、昨年の5月には教育再生実行会議から「これからの大学教育等の在り方について」という提言が出されました。そこには平成29年度までを「大学改革実行集中期間」とすると書かれています。また、具体的な方針が以下の5項目にまとめられています。

1. グローバル化に対応した教育環境づくりを進める。
2. 社会を牽引するイノベーション創出のための教育・研究環境づくりを進める。
3. 学生を鍛え上げ社会に送り出す教育機能を強化する。
4. 大学等における社会人の学び直し機能を強化する。
5. 大学のガバナンス改革、財政基盤の確立により経営基盤を強化する。

これらの方針により改革が実行に移されようとしています。皆様方も報道等で知る大学の種々の変化はこの方針に基づいていると考えれば、納得できるのではないかと思います。

同時に、これら5項目がいずれも工学に非常に関係していることに気付かれると思います。すなわち、第1項目に関しては、工学部を卒業して社会に出れば、多くの人が短期間あるいは長期間海外出張することになりますし、また世界的に展開している会社等に就職することを我々も望んでいるわけです。そのためにもグローバル対応の教育は必須と考えております。

第2項目に関して、イノベーション創出はまさに工学の責務です。現在、工学部は10学科構成になっており、工学系のほとんどの領域を網羅しています。したがって、産業のイノベーションの芽は工学部から出てなんらおかしくないわけです。むしろ、これから産業界で活躍

する人材を輩出するためには、イノベーション創出に結び付く教育・研究を行う必要があります。工学という変化の大きい領域を考えた場合、伝統にしがみつ়くよりも、むしろ新しい領域にチャレンジすることが重要と考えております。

第3項目は、工学部はしっかりと学生を教育していますか、単に知識を与えるのではなく社会に出てから活躍できる人間を育てていますか、という問いかけだと思います。以前ですと大学を卒業しただけで一定の評価が得られましたが、いまはその内容と質が問われています。我々はしっかりとした教育を提供していると自負しておりますが、より一層、質の向上を図る必要があると認識しております。

社会人の学び直しが第4項目です。技術の進歩は非常に速く、常に第一線で活躍するためには非常な努力が必要になります。また、新しい産業も生まれてきていますが、そこで必要とされる知識を新たに身につけるのは大変です。それらに対応するために大学で学び直したらどうか、また大学はそれに対応する制度を作ったらどうかというのがこの項目です。我々はこの学び直し制度をより実効性があるものにするため、個々人に対応するオーダーメイド的な教育プログラムを用意することを議論しているところです。

最後が大学のガバナンス改革です。教授会が力を持ちすぎて、学長がリーダーシップをとれないとよく言われます。教員個々が力を持ちすぎて、学部長がリーダーシップをとれないといいなおしてもよいかと思えます。たしかに制度的な問題もあるかもしれませんが、本質は学長や学部長の資質の問題です。組織として資質のあるリーダーを育てなければいけませんし、もし育てなければ外部から人材を迎え入れるというのはどの社会でも同じだと思います。

以上の方針を工学部に当てはめながら、更なる改革に積極的に取り組んでいく所存ですし、常に最先端をゆく工学部であり続けたいと考えております。

最後になりますが、私が工学部長の職に就いてから今年で4年目になります。今年度で任期が終了しますとともに、私自身が定年退職を迎えます。来年からは暖かく工学部を見守っていきたくと考えております。

同窓生の皆様方におかれましても、今後ともご支援のほど、よろしく願いいたします。

建築学科

■ 定年退職の先生から

「38年間の教員生活を振り返って」

安藤 正雄

建築人間工学の泰斗、小原二郎先生のお声掛けで奉職して38年、今春私は千葉大学での教育研究生生活を終えました。赴任当初の担当科目は家具・インテリアを扱う室内計画でしたが、小原先生は私に建築の部品化・工業化を研究することを期待しておられました。私が赴任して間もなく小原先生は定年で本学を去られ、それからしばらくして東京高等工芸以来の輝かしい伝統を誇る木材工芸・室内計画分野もその看板を下ろすこととなってしまいました。いたし方なかったというほかないですが、今も心残りに思うことの一つです。



私の研究上の関心は「建築ものづくり」にありました。建築構法、構法計画、建築生産等と呼ばれる分野が該当します。私たちの世代が世に出て最初の半生は成長の時代、後半は縮小へと向かう時代でありました。したがって、私の研究も「フローからストック」へという転換の中で建築生産をとらえなおすことに向けられました。またもう一つ、私にはこだわりがありました。近代が不可避的にもたらした計画・設計と生産・施工の乖離を、学問・方法としてもう一度つなぎ合わせたいという思いです。構工法という用語や構工法計画が一定の認知を得たことにいささかの自負はありますが、その意義を語る立場に私はありません。

学生たちとの交わりはいつも多くの喜びを与えてくれました。私が心がけたことは、学生たちに生きた機会を提供すること、そのために必要なリソースを確保すること、そして行き過ぎた献身を止めることであります。設計した構造物を自ら施工するという、ものづくりの醍醐味や、現場の楽しさを体験させるために、



唐桑わかめ番屋1棟目の完成を祝して記念撮影

30年にわたり岐阜県加子母村（現中津川市）等を拠点に毎夏サマースクールを開催したことも、今や楽しい思い出であります。2011年の東日本大震災発生後はやむにやまれぬ気持ちでその活動の場を気仙沼市唐桑に移しましたが、復興支援が中途半端に終わってしまったことが残念といえば残念であります。

■ 新任教員自己紹介

林立也 准教授

2013年9月付で、建築学コース准教授に着任致しました。早稲田大学、東京大学大学院で学んだ後、日建設計、日建設計総合研究所に勤務しました。在職中は、設備設計の業務をはじめとして、建築・都市に係る環境・エネルギーに関するコンサルタントとして活動し、主には具体的な建築物の環境計画、省エネルギー分析から、地域エネルギー供給の最適化、自治体営繕部門の環境配慮設計指針、将来ビジョンの作成支援等を行っておりました。また、業務とは別に、CASBEE（建築物総合環境性能評価システム）の開発・普及、スマートウェルネス住宅の研究、知的生産性の研究など、建築物の環境配慮と関連する今後の日本社会に求められる制度、枠組み等に関する研究活動にも多く従事しており、今後はこれらのテーマを中心に研究活動を行っていきたくと考えております。どうぞよろしくお願い致します。



■ ソーラー・デカスロン2度目の出場！

3つの部門で入賞を果たしました！

フランス・ベルサイユで開催された世界16カ国 20大学によるゼロエネルギー住宅設計・建設・運用コンペ（ソーラー・デカスロン・ヨーロッパ2014）に、千葉大学は日本から唯一のチームとして前回に引き続



竣工した「ルネ・ハウス」

き2度目の参加を果たしました。

千葉大学チームは多くの企業や団体の協力も得ながら、同時に総合大学の強みを活かして工学部以外の学科や組織と協力したチームを編成して、災害復興住宅の新しい提案「ルネ・ハウス」をもって2014年6～7月にフランス・ベルサイユで開催された本大会に挑みました。



トロフィーを前に「ルネ・ハウス」で記念撮影

大会は施工期間、コンテスト期間、解体期間の40日に及ぶ長丁場です。施工期間中は期間内竣工を目指して一丸となり、コンテスト期間中はそれぞれの能力を活かした役割分担で、10部門の審査項目で高得点を狙いました。

総合成績は11位でしたが、千葉大学チームは10部門中の「Architecture」「Engineering & Construction」「Energy Balance」の3部門で3位以内入賞を果たすことができました。審査の途中では1位を独走する場面もあるなど、前回の経験を活かし、世界の建築界に強い存在感を示すことができました。引き続きご支援・応援のほど、よろしくお願い致します。

(林立也)

■ 教員・学生の活躍

・「みのはな同窓会館」(鈴木准教授設計)完成

亥鼻キャンパスに鈴木弘樹准教授が設計された「みのはな同窓会館」が完成しました。これは千葉大学医学部創立135周年を記念した事業で、老朽化した建物の改築するプロジェクトです。新しい施設は鉄筋コンクリート造+鉄骨造の2階建ての建物で、和室やホール、会議室等を有しており、部活動から講演会まで幅広く使用されていま



す。引き続き、鈴木研究室による増築計画が進行中で、ガラスウォールで構成された空間にカフェやゼミスペースを設け、本学が進めているイングリッシュカフェとしての機能を持つ予定です。

(鈴木 弘樹)

・エネマネハウス2014で優秀賞を受賞

エネマネハウス2014とは、経済産業省資源エネルギー庁の事業の一環として、大学と企業の連携により、“2030年の家”をテーマに、“エネルギー”、“ライフ”、“アジア”の3つのコンセプトの下、先進的な技術や新たな住まい方を提案するモデルハウスの展示会です。平成25年8月29日～9月17日に一般公募した中から審査があり、千葉大学チームを含む5大学が選ばれました。その後、2014年1月8日～21日に東京ビックサイト周辺で建設、1月22日～31日に各種性能測定準備、測定が行われ、優秀賞を獲得しました。1月29日～31日には一般展示もされました。

(川瀬 貴晴)



エネマネハウスの外観全景、および内観 (撮影：宗方淳 准教授)

■【訃報】田中尚先生

元・建築工学科教授であった田中尚先生が、平成26年9月10日(水)に91歳でご逝去されました。田中先生は構造工学の方面で多くの人材を育成され、また教科書の執筆にも尽力されておられました。謹んでご冥福をお祈り致します。

(島田 侑子)

都市環境システム学科

■ 都市環境システム学科だより

学科長（教授）大坪 泰文



以前、2008年の工学同窓会会報において都市環境システム学科だよりを書かせていただきましたが、その折、学科の教員構成表を添付しました。当時、学科の教育に携わっていた教員は34名でした。あれから6年が経過し、工学部改組による教員の異動や定員削減などで、現在の教員数は27名と大分少なくなりました。その分、教員の負担がやや（教員によりかなり）増加することになりましたが、社会情勢に対応しつつ、学際領域にふさわしい総合的な教育研究を続けていきたいと考えております。

学生の側から見たとき、今一番の関心事は、2016年春の卒業予定者、つまり現在の学部3年生から、就職説明会の解禁や採用選考開始の時期が、大幅に繰り下げられることにあると思われまます。学生は学業を優先すべきという要請に対して産業界が応えるかたちで、これまでより就職活動が遅く始まることとなります。一方で、インターンシップの重要性が指摘されており、学生が自分の将来に関連のある就業体験を行うことで、就職活動でのミスマッチを防ぐことに役立つと理解しております。実質的な採用一次選考ではないというのが基本スタンスになってはおりますが、就職サイトでのインターンシップ情報が増えており、学生もこれにかなりの注意を払っているように見受けられます。これまで、当学科では学生自身がインターンシップ先を探して研修するというものでしたが、来年度以降、インターンシップ研修を教育カリキュラムに積極

的に取り込むことにしており、キャリア教育の一環として重要な位置づけになると考えております。

大学院都市環境システムコースにおける博士後期課程の定員は6名です。多くの大学で博士後期課程への進学者が少なく、定員を満たしていないのが実情ですが、当コースにおける在籍者は32名であり、様々な切り口で独創的な研究を展開しています。都市環境という融合領域での研究の面白さが学生に理解されたものであり、高度な知識を身につけた専門家を育成することに喜びを感じております。

昨年度からの教員の異動としては、中谷正人客員教授の定年退職と後任として大川信行客員准教授の着任がありました。常勤としては、都市基盤工学教育研究領域へ劉ウェン助教の着任がありました。20歳代という工学部としても数少ない若手の教員であり、山崎文雄教授と連携して教育研究を担当することになっております。また、今年度は、郭東潤助教が、サバティカル研修により12月までハーバード大学で研修を行っております。帰国後、研修の成果を学科における教育研究活動に活かしてくれるものと期待しております。

この1年間における都市環境システムコースの教員の受賞として、郭東潤助教のInternational Urban Design Conferenceにおけるベストポスター賞がありました。この他に学生の受賞として、学長賞1件、学会賞6件がありました。学長賞は2年続けて都市環境システムコース博士後期課程修了者が受賞しており、教員も学生も多様な分野で活躍しております。今後とも皆様の温かいご支援をお願いいたします。

（おおつぼ やすふみ）

■ 新任の先生ご紹介

大川 信行 客員准教授



平成26年4月1日付で都市環境システム学科客員准教授を拝命しました。平成3年本学建築工学科卒業、平成6年東京大学大学院工学系研究科建築学専攻を修了した後、大成建設(株)設計本部での7年間の勤務を経て設計事務所を立ち上げ、今日に至っております。平成20～24年には建築学科にて、また平成21～25年までは本学科大学院にて非常勤講師を勤めてきましたが、今回改めて研究室を預かること

になり背筋が伸びる思いをしております。

いわゆる姉歯事件だけではなく日々様々に起こっている問題を通じて、設計という仕事に対して求められる品質はますます高くなる傾向にあると言えます。学生たちには、社会の信頼を得ながらプロジェクトを完遂するために、プロセスをより科学的に捉える実務の実際を伝えていきたいと思っています。

また学部生の時大河直躬先生に指導を仰いで以来、建築や都市の歴史の研究を設計の実務の傍ら続けてきました。新たなアイディアの裏付けとなるような歴史的な知識の蓄積にも、力を注ごうと考えています。以後よろしくをお願いいたします。

（おおかわ のぶゆき）

■ 定年退職の先生

新しい都市の開拓者であれ

中谷 正人



私が都市環境システム学科に非常勤講師としてお招きいただいたのは2000年でした。「そろそろ後輩の面倒を見てよ」と誘われてホイホイ引き受けたのですが、まさか15年も務めるとは…。

初めて担当したのが3年生土曜日の演習授業でした。この当時、学科自体の方向性もまだ定まらず、私自身も都市環境システム学科の意味や意義を理解できず、演習授業では建築学科のように、2つの課題（教育施設とオフィスビル）の成果物を提出させるようにと言われ、素直に従いました。以前にも他の大学で演習を教えた経験もあったので、3年生だからといっても住宅くらいしか設計経験のない学生が、いきなり学校やオフィスビルを設計すると、どんなに恐ろしい結果になるか知っていました。

2年目。課題を任せて欲しいとお願いし、千葉県庁に在籍していた学生時代の園芸学部の仲間に、木造の廃校が残っているところを探してもらった結果、鋸南町で発見。学生全員を引き連れ、現地で町の担当者から人口の推移、基幹産業など町の基本的な状況を説明していただき、廃校を見学した上で、まず町を活性化する方法を探る。そしてそのコンセプトに従って必要な施設を設計する。校舎はどのように利用しても自由である、というのが課題でした。具体的な課題地を設定したことで、学生たちも積極的に課題に取り組んでくれるようになりました。その後、課題地は東京・京島地区、山武市と移りましたが、基本的な方針に変更はありませんでした。

このような演習授業を通しながらでもありますが、それ以上に都市環境システム学科の存在意義が私なり

にわかってきたのは、都市環展のおかげでした。やっと数年前、4領域すべてから卒業研究が出展され、4領域の先生がクリティークに参加された時です。それまで、他の領域の先生方のお顔こそ存じ上げてはいたものの、具体的な研究内容についてはほとんど知りませんでした。しかし、短時間ではありましたが直にお話を伺えたおかげで、とんでもない豪傑が集まった梁山泊のような学科（失礼！）であることが判明、たいへん驚きました。

4つの領域それぞれが、「都市」にとっていかに重要な役割を果たすか、改めて教えられました。

しかし、敢えて言わせていただければ、4つの領域はあくまでも「工学的」な面に限られています。都市には文化的な側面も多々あります。歩いていて楽しい路。誰かと待ち合わせたくなる街角。のんびりしたくなる公園。昔をしのばせる家々の佇まいなどなど。私たちが感性を持ち合わせている人間ならば、誰でも感じられる都市の魅力にまで、学生たちには思いを馳せて欲しいものです。また、そのような感性を先生方はお持ちですから、ぜひ個性を発揮していただきたいと考えています。

都市環境システム学科を卒業する学生諸君には、自分自身で領域を拓けながら、大きく変貌する都市を、形式的ではなく、根底からとらえ直す開拓者として活躍していただきたいと思っています。

幸い、私は都市環境システム学科の第1期生からお付き合いすることができました。この魅力的な学科の草創期から現在までを見続けることができたのは、ジャーナリストとしても貴重な体験でした。改めて皆様にお礼を申し上げます。

退職を機に、私は本業である編集者に戻ります。教職からは遠ざかりますが、これからの都市環境システム学科の発展を楽しみに見続けていきたいと思っています。

(なかたに まさと)

■ 新任の先生ご紹介

劉 ウェン 助教



平成26年4月1日付けで建築・都市科学専攻都市環境システムコース助教に着任いたしました。平成25年3月に千葉大学大学院工学研究科同専攻を修了後、平成25年4月から東京工業大学大学院総合理工学研究科人間環境システム専攻にて日本学術振興会外国人特別研究員として1年在籍し、現職に就きました。これまでの研究では、衛星画像や航空写真などの広域

の画像データを用いて、都市を観測するリモートセンシング技術に関する研究を様々な手法とアプローチで行ってきました。本コースの修了生であり、多様な専攻分野の視点から都市の抱える問題を発見し、解決するような指導と訓練を受けて行きます。今後はこれまで身に付けた知識と経験を活かし、視野を広げながら、研究と教育に力を尽くしたいと考えております。また、宇宙資源である衛星の利用推進に貢献したいです。未熟もので至らぬ点が多いと思いますが、精一杯頑張ります。何卒ご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願い致します。

(りゅう うえん)

デザイン学科

■デザイン学科の今年度の動向

工芸図案科、工芸彫刻部、工業意匠学科、デザイン工学科、デザイン学科を卒業生された皆様には、日頃より第I部会ならびに工学同窓会をご支援いただき、誠にありがとうございます。

まず教員の動向についてお知らせします。今年の3月にデザイン文化計画研究室の鈴木直人教授が定年退職されました。今年度末の3月には、人間生活工学研究室の勝浦哲夫教授が定年で退職される予定です。学科を支えてくださった先生方が去られるのは残念でなりません。今後も大所高所からのご意見、ご示唆を頂ければ幸いです。新任教員のご紹介です。今年度6月に、それまで客員教授であった林孝一教授が、製品デザイン研究室の専任教授として着任しています。

次に、学科の現状報告をいたします。世界展開力強化事業の一つである大陸間デザイン教育プログラム(CODEプログラム)は、順調に進行しています。26年3月に発表された中間評価では、「S評価：優れた取り組みであり、事業目的の達成が見込まれる」課題であると高く評価されました。7月には4名の学生が、無事に約一年間の海外留学から帰国しました。そして8月下旬には、新たな4名が出国していきました。これ以外にも2週間程度のワークショップが、協定校と本学でそれぞれ複数回開催されており、多くの学生が海外大学との交流が行われています。

また今年度は学科に関連する建物で改修工事が予定されています。以前「南棟」と言われていた工学部2号棟の耐震補強工事です。工事に伴って、それなりの騒音が予想されるため、後期の授業は2号棟以外の建物で行う予定となっています。しかしながら、研究室については引っ越しの予定はありません。工事中も従来の居室におりますので、いつものようにいらしていただければ幸いです。

8月1日には、恒例となっているオープンキャンパスを実施しました。総勢428名の方にご来場頂きました。先生方や学生さんによるデモンストレーションや研究室で取り組んでいる研究内容の紹介、作品展示、入試相談などが行われました。また今年度は、新たに「社会で活躍されている卒業生による講演会」を実施しました。この講演会にも100名を軽く超える参加者がありました。今年度も例年同様、参加者を申し込み順の定員制で募っているため、早々に申し込みを締め切らざるを得ない状況となっています。これもひとえに社会で活躍されている卒業生の皆様のおかげと存じます。教員一同、伝統ある本学科をさらに発展させるべく、教育・研究に努力して参ります。引き続きご

厚誼並びにご支援賜りますよう何とぞよろしくお願い申し上げます。

(平成26年度 デザイン学科 学科長 寺内文雄)

■新任教員の挨拶

2014年6月1日付けで製品デザイン研究室に教授として着任いたしました。1982年に、本学の工学研究科工業意匠専攻を修了後、トヨタ自動車(株)にて自動車のデザイン業務に32年間携わってまいりました。2010年からは客員教授及び非常勤講師として論文の指導やトランスポートデザイン演習を担当し、この度、正式に本学の教員となりました。私が企業でデザインに関わるようになった'80年代初頭から現在までの間、'70年代の石油危機からの脱却を機にした'80年代の日本産業の台頭とバブル経済、'90年代初頭のバブル崩壊とIT産業の興隆、2000年以降の新興国市場の発展と、世界情勢や産業界の変化の中、工業デザイナーに求められる役割もその範囲が拡大してきました。当初はベースとなるスタイリングの追及、次にエンジニアリングとスタイリングの融合、また新たな価値を持った商品企画、更には企業のブランド構築への参画、という具合です。今では、デザインシンキングと称した、我々にはお馴染みのデザイン手法が、他分野でも問題解決手法として注目されています。この様に広範囲な分野で役立つスキルを身に付けた貴重な人材の育成に少しでも寄与できればと思っております。

(製品デザイン研究室 教授 林孝一)



■退職された鈴木直人先生から

千葉大学工学同窓会の皆様には、私の退職のご挨拶をさせていただきます。私は、10年前に国連の専門機関を退職していますので、今回は二度目の定年退職となります。しかしながら、今回は特別な思いを持って西千葉のキャンパス最後の日を迎えました。それは工学部の教員や学生の皆様とのかかわった活動、そして一緒に過ごした時間が私にとって大切な宝物だと気付いたからだと思います。特に常勤として5年と3か月を過ごしたデザイン学科では専門領域の異なる先生方と一緒に教育・研究活動を行い、「クロスファーターライゼーション」の本当の意味を理解できたことは何物にも代えがたい経験になりました。又、私の研究活動が研究室の学生によって多くの新しい展開を成し遂げた

ことにも感謝しています。

現在、千葉大学はグローバル化に対応する人材育成に向けたプログラムに挑んでいます。真のグローバル人材とは自分の足元をよく見ている人のことをいうのかもしれませんが。日本の文化の素晴らしさを強く認識する人材が育っていくよう切に願っている次第です。最後になりますが、この写真は昨今「晴耕雨読」の生活に少しずつ慣れてきた私が外房の里山近くの古民家で撮ったものです。



■サバティカル報告

今年の4月から12月一杯までの予定で、シンガポールのナンヤン理工大学に滞在しています。ナンヤン理工大学はここ数年で急激に世界ランキングを向上させており、2013年のQS世界ランキングでは41位、2014年のQSアジアランキングでは7位まで上昇しました（ちなみに東京大学は10位、千葉大学は62位です）。急成長の背景には国や企業からの潤沢な研究予算と研究者間の厳しい競争があると思われます。シンガポールは国家予算の20%を教育に充てる教育大国です（日本は5%程度）。また、ナンヤン理工大学はテニュア（終身雇用的一种）を取ることが非常に難しく、若手教員の半数が3年もしくは6年以内に大学を去ってしまいます。外国人研究者も多く、教員の65%が外国人です。

受け入れ研究者のChun-Hsien Chen先生は利用者の行動データやコンピュータシミュレーションの結果に基づいた科学的アプローチによる製品デザインを行っており、私が滞在する間は心理・行動指標や生理指標に基づいた使いやすい電子機器の研究・開発を共同で進める予定です（未発表の研究なためやや曖昧な表現ですみません）。海外での研究は慣れないことも多く、日々戸惑いながらも、多くのことを学んでいます。

最後に、このような素晴らしい研修の機会を与えてくださった日比野治雄教授をはじめとするデザイン科

学コースならびに工学研究科の先生方、留守中の授業を代わりに担当して下さった工学研究科特任研究員・崔庭瑞先生、東京福祉大学青山郁子先生、昭和大学本間元康先生、研究室の運営に様々な形で協力して下さいました研究室の学生の皆様に心よりお礼申し上げたいと思います。

（デザイン心理学研究室 准教授 小山慎一）

■国際化プログラムの推進

－昨年の会報に「CODE Program －大陸間デザイン教育プログラム」開始を報告いたしました。また平成24年度より大学全体で推進している「グローバル人材育成推進事業」もあって、昨今は学科を挙げて語学教育、海外連携ワークショップ（WS）、交換留学など国際化教育を進めています。

昨年度は、欧米の大学との連携したワークショップ（WS）を12回、アジアの大学と連携したWSを12回実施しました。海外渡航と日本開催が半々です。欧米への渡航WSは、ヘルシンキ、リスボン、パリ、ミラノ、ケルン、グラスゴー、ニューヨークで実施しました。WSでは提携校の学生と3人ほどのグループを組んで議論しながらデザイン作業を行います。テーマやWSの進め方は様々ですが、フィールドワークを行ったり、提携校の教員やデザイナーのレクチャーを受けたり、現地の企業や工場の見学を行ったりします。参加学生は、調査手法、アイデア発想、かたちづくりや視覚化プロセスなど、WSを通して異なるアプローチを実感しています。提携校ごとに異なる教育傾向は教員として興味深いものです。WSでは企業とも連携し、社会的課題あるいは企業活動最前線のトピックをテーマに設定し、関連技術を紹介いただき、WSの指導や講評に参画いただいています。海外で実施するWSへ企業の若手や中堅のデザイナーに参加いただくこともあり、企業、提携校、本学ともに刺激を受け、WSが活性化しています。企業との連携にあたっては多くの同窓生の方々に協力いただきました。

交換留学は毎年10名前後が行うようになりました。留学期間は一年間ですが、半数はCODE Program制度にもとづいて半年ずつ二校の提携校で学んできています。デザインを学ぶことならず、文化や社会の面でも、違いについて考えることは多いようです。

今後、より有意義なプログラムとして発展させていきたいと思っています。グローバル化推進について、皆様よりのご助言ご要望をいただければ幸いです。

（コンテクスチュアルデザイン研究室

准教授 樋口孝之）

機 械 工 学 科

■ 機械工学科の近況

今年も8月上旬の猛暑の中、恒例のオープンキャンパスが開催され、本学科では全教職員の協力のもとに見学会5回、講演会2回を実施し、各回約100名の申込を得て、合計600名以上の参加があり大盛況でした。機械工学は昔も今も工学部の基幹学科であり、また最も人気の高い看板学科でもあり、そのことを同窓生の皆様のご活躍とご支援の賜物と感じつつ、今後も世の期待に応えるべく教職員一丸となって、尚一層の努力と継続的な改善の必要性を痛感した一日でした。

学科長 森田 昇



さて、本年度も当学科の教員に異動がありました。まず、本年3月末で野波健蔵先生が定年退職され、名誉教授とされました。野波先生には同年4月から引き続き特別教授として、ミニサーベイヤーコンソーシアムの世界展開を通じて本学の発展のためご尽力頂いております。また、前野一夫先生が定年まで1年を残して本年4月から木更津高専校長として異動となりました。木更津高専と当学科とは毎年交流会を実施しており、益々活発な教育研究交流が期待されます。一方で、昨年10月に材料・強度・変形教育研究領域の小林謙一先生が教授に昇任されました。また、環境・熱流体エネルギー教育研究領域の窪山達也先生と太田匡則先生がそれぞれ昨年8月と本年4月に准教授に昇任され、学内外での益々のご活躍が期待されています。さらに、森吉泰生先生がセンター長を務める工学研究科附属次世代モビリティパワーソース研究センターが7月に竣工し、文部科学省、経済産業省、千葉県を初め各界から多くの来賓を迎えて、盛大な記念式典が開催されました。自動車産業の更なる発展に繋がるオールジャパン体制の教育研究拠点として国内外から大きな注目を集めています。

残念なお知らせとしては、旧第2講座（機械要素）講師の大堀浩先生が平成26年4月2日にご逝去（享年86歳）されました。ここに謹んでお悔やみ申し上げます。お知らせが大変遅くなりましたが、平成24年12月27日に志茂主税・名誉教授がご逝去（享年94歳）されました。ここに謹んでご冥福をお祈り申し上げますとともに、ご報告申し上げます。

千葉大学を取り巻く諸環境は最近厳しさを増してきていますが、機械工学科の力強い未来への持続的発展のために、同窓の皆様におかれましては、一層のご支援とご鞭撻のほど、宜しくお願い申し上げます。

■ 教員/学生を受賞（2013.10～2014.9）

【教員】

- ・並木明夫准教授が2013年11月25日、千葉エリア産学官連携オープンフォーラム 2013にて学長賞（優秀賞）を受賞。
- ・小林謙一教授が12月6日、日本材料学会・高温強度部門委員会より貢献賞を受賞。

- ・松坂壮太助教らが2014年3月19日、2013年度精密工学会論文賞を受賞。
- ・大武美保子准教授が4月15日、文部科学大臣より表彰（平成26年度科学技術分野：若手科学者賞）。
- ・窪山達也准教授が5月22日、自動車技術会・2013年春季大会学術講演会にて優秀講演発表賞を受賞。
- ・浅沼博教授が9月8日、日本機械学会 機械材料・材料加工部門委員会より2013年度部門賞（功績賞）を受賞。

【学生】

- ・後藤俊介君（D3：森吉研）らの論文が2013年11月19日、米国自動車学会（SAE）/自動車技術会よりSETC小型エンジン国際会議で優秀論文賞を、また後藤俊介君が優秀講演賞を受賞。
- ・柳迫俊郎君（D2：浅沼研）が2014年1月16日、第23回日本MRS年次大会にて優秀賞を受賞。
- ・八木悠介君（M2：森田研）が3月6日、千葉県加工技術研究会より優秀講演賞を受賞。
- ・前田龍一君（M2：森吉研）、植原亮太君（B4：森吉研）、後藤俊介君（D3：森吉研）がそれぞれ3月7日、自動車技術会関東支部講演会にて2013年度ベストペーパー賞を受賞。
- ・日下秀之君（B4：田中研）が3月14日、日本機械学会・関東支部学生員卒業研究発表講演会にて学生優秀発表賞（BPA）を受賞。
- ・谷口皓一君（M2：三神研）が3月15日、日本機械学会・関東支部第20期総会講演会にて日本機械学会若手優秀講演フェロー賞を受賞。
- ・前原直友君（B4：森田研）が3月18日、精密工学会第21回学生会員卒業研究発表講演会にて最優秀講演賞を受賞。
- ・柳迫俊郎君（D3：浅沼研）が9月8日、日本機械学会 機械材料・材料加工部門委員会より部門一般表彰（優秀講演論文部門）。

■ 岡本純三先生・大堀 浩先生ご逝去

元機械要素研究室で教鞭を執られた、岡本純三先生が平成24年6月19日に82歳で、また大堀浩先生が平成26年4月2日に86歳でお亡くなりになりました。岡本先生は、長きにわたり機械要素学、特に転がり軸受における理論面と実用面で関連分野に大いに寄与されました。また、千葉大学大学院自然科学研究科設置に当たってご尽力され、研究科の基礎を築かれました。また、大堀先生は、定年退職されるまでの長い間、機械工学科において精密測定および設計製図等の教育を担当され、多くの有能な人材を機械工学分野に輩出されました。両先生とも、どの学生に対しても柔和に接せられ、決してお怒りにはなりません。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。



在りし日の岡本先生(左)と大堀先生(右)
(1993年3月)

(記：大森達夫)

■ 野波健蔵先生 ご退職

ロボット工学教育研究分野 並木 明夫 准教授

平成26年3月末をもちまして、機械系から野波健蔵教授が定年退職されました。それに先立ちまして、平成26年2月21日（金）に野波先生の最終講義と退職記念祝賀会が開催されました。

最終講義は西千葉キャンパスのけやき会館1階大ホールにおいて、13時より約3時間に亘って行われました。平日にも拘わらず学内外から多くの方々のご参加があり、ホールは満席で立ち見がでるほどでした。講義の内容は、制御工学とロボット工学に関する話題であり、先生のこれまでのご研究の歴史を中心に分かり易くお話しされました。講義の内容は非常に多岐に渡っており、先生の御業績が幅広い分野に貢献されていることに改めて驚かされました。

講義の直前には、先生の主要な研究テーマの一つである自律マルチロータヘリコプター（マルチコプター）の実演も行われました。野波先生はマルチコプターの研究の第一人者であり、近年その研究成果は産学官の多くの団体から注目を浴びています。マルチコプターが檀上の脇から中央まで飛行する姿は、プロペラの生み出す音と風圧もあって大変な迫力であり、檀上中央に置かれた机の上に安定かつ正確に着陸する様子は、先生の開発された制御システムの偉力を改めて感じさせるものでした。

退職記念祝賀会は、場所を変えて三井ガーデンホテル千葉にて開催されました。千葉大学の教職員の方々以外にも、関連する会社や団体の方々、卒業生の方々など、先生の幅広い交友関係と人脈から非常に多数の参加者があり、約200名以上の方々にお集まりいただきました。最初に、来賓の齋藤学長のご挨拶を頂き、多くの来賓の方々のご挨拶を頂いた後に、先生の今後の所信表明に移りました。先生の研究開発への情熱は退職となっても全く衰えることなく、むしろますます盛んであり、この所信表明でも大変情熱的に今後予定されているプロジェクトについて解説されました。その後、在校生のレクリエーション、花束贈呈等を行い、大盛況のうちに閉会となりました。

野波先生は平成26年3月に千葉大学を退職されましたが、同年4月からは千葉大学特別教授として研究に専念

されています。千葉大学での長年にわたる教員生活大変お疲れ様でした。そして、研究のご指導など、今後ともよろしく願いいたします。



挨拶される野波健蔵先生

■ NHK大学ロボコン2014奮戦記

知能機械システム教育研究分野 大川 一也 助教

平成26年6月1日、NHK大学ロボコン2014が国立オリンピック記念青少年総合センターで開催され、千葉大学のロボコンサークルCRSが出場しました。このサークルの構成員は、機械工学科の割合が多いため、ここでご紹介させていただきます。

今年の競技課題は、操縦者が操作する「親ロボット」と、自動で動く「子供ロボット」の計2台のロボットが協力しながら4つの課題（シーソー、ポールウォーク、ブランコ、ジャングルジム）に挑む内容です。NHK大学ロボコンに出場するには、事前の書類審査・一次ビデオ審査・二次ビデオ審査に合格しなければならず、千葉大学からは実に7年ぶりの出場となりました。

当日、出場18チームによる予選が行われ、決勝トーナメントに進めるのは、わずか8チームです。結果としては、予選で1勝1敗となり、残念ながら決勝トーナメントには進めませんでした。しかし、親ロボットの安定した走行や4つのポールを自律的に渡り歩く子供ロボットの動きなどが総合的に評価され、マブチモーター(株)から特別賞をいただくことができました。

競技課題の難易度は、年々、難しくなっておりますが、これらの経験やロボット技術を積極的に後輩に引き継ぐ様子も見られ、今後の活躍が非常に楽しみとなっております。今年の競技の様子は7月21日にテレビ放送されてしまいましたが、今後の放送でも千葉大学のロボットを見る機会があるかもしれません。応援をよろしくお願い申し上げます。



シーソーに子どもロボットを乗せる様子



ほかの競技者から好評だったポールウォーク

メディカルシステム工学科

■ メディカルシステム工学科の現況

昨年10月に、本学科・コースは、これまで緊密に協力してきたフロンティアメディカル工学研究開発センターと完全一体運営となりました。具体的には、本学科・コースの専任教員が、フロンティア医工学センターに改名されたセンターの専任教員となりました。千葉大学の医工学組織として、さらに研究成果と社会貢献の実績をあげ、アジアの医工学研究・教育の拠点を目指します。

そのフロンティア医工学センターの専任教員全員計19名が本学科・コースの教育・研究を担当することとなり、メディカルシステム工学科・コースの教育・研究がより充実されることが期待できます。設備の充実も進んでいます。これまでもCT装置等大型装置が導入されてきましたが、今年度から、Open MRI装置も本格的に稼働することとなりました。卒論研究が



らそれらの装置を利用することが可能となっています。本学科・コースの教育・研究にさまざまな波及効果が期待されます。

学部生、院生共に就職率および就職先も良好な状況が続いております。最近では医療系の企業に就職する学生が増えてきました。

博士前期・後期への進学に関しては、例年、非常に

高い倍率になっています。8月に行われた博士前期課程入学試験の志願倍率は2.35となっています。一方では、博士課程の志願者数に比べ、定員が少ない状況が続いており、このため、学科・コースとしては、定員増加のため、引き続き各方面に要請しているところです。

(学科長 兪 文偉)

■ 新任の先生のご紹介

2014年5月よりメディカルシステム工学科の助教に着任しました北佳保里です。東京大学大学院工学系研究科精密機械工学専攻において博士後期課程を修了後、これまで、東京大学大学院情報学環、株式会社国際電気通信基礎技術研究所 (ATR)、



国立精神・神経医療研究センターなどに所属し、リハビリテーション工学や神経科学に関する研究を行ってまいりました。リハ工学に関するテーマとしては、筋電義手と脳卒中患者のためのリハビリ支援装置の開発があります。筋電義手に関しては、表面筋電位から人の意図する動作を識別する手法を提案し、さらに使用者の筋電義手操作に対する習熟度を判定し、それに応じたトレーニングプログラムを提供するシステムの構築を行いました。脳卒中リハに関しては次のような研究を行っております。脳卒中の後遺症の一つとして感覚麻痺が挙げられますが、感覚麻痺が重度である場合、運動麻痺が軽度であっても、日常生活における麻痺肢の使用が妨げられることがあります。そこで、物を把持する際の指先の力に応じて電気刺激の強度を調整し、非麻痺側の肩など感覚のある部位にフィードバックする感覚フィードバック装置 (SENS) を開発し、実際の脳卒中症例でSENSを用いた訓練効果の検証を行っております。神経科学に関するテーマとしては、MRI計測や行動実験により音楽家のフォーカルジストニアの神経基盤を解明する研究を行っております。今後も、工学と医学をつなぐ研究を実施し、メディカルシステム工学科の教育や研究に貢献できるよう尽力してまいります。皆さまには、今後ともご指導ご鞭撻を賜りますよう、よろしく申し上げます。

■ 学生の活躍

伊佐周平さん (学部4年、羽石・大西研究室) が平成25年度情報フォトニクス研究会第8回関東学生研究

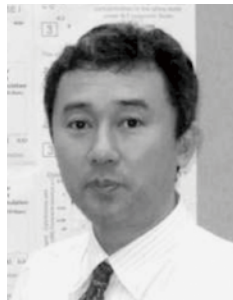
論文講演会において、優秀講演賞を受賞しました。

鈴木健太さん（学部4年、伊藤・齊藤研究室）が電子情報通信学会東京支部学生会研究発表会（第19回）において、学生奨励賞を受賞しました。

吉田哲也さん（学部4年、伊藤・齊藤研究室）が映像情報メディア学会放送技術研究会学生発表会において、最優秀賞を受賞しました。

■ 岩坂正和先生からのご挨拶

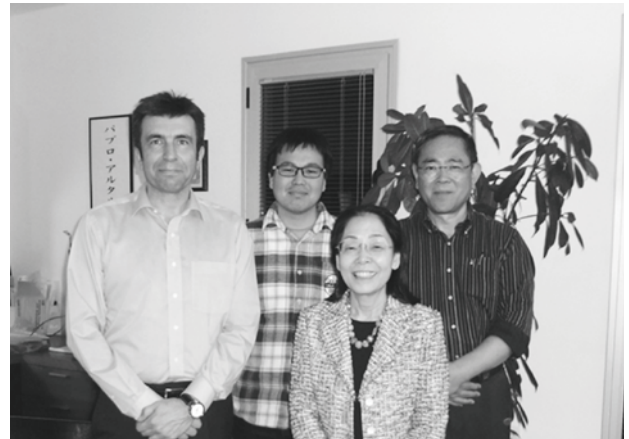
千葉大学にて在職中に大変お世話になりました。岩坂正和です。去る4月より広島大学ナノデバイス・バイオ融合科学研究所に転出致しました。千葉大学工学部メディカルシステム工学科にて約10年近く教育と研究の機会を得られたことは大変有意義でした。特に学生の皆さんと自由な発想で新しい研究分野を切り拓けたという実感も得ました。まだ大学教員現役ですが、振り返りますと医工学の分野に学生時代に入門してから九大工学部で10年、東大医学部で10年、そして千葉大工学部で10年が経過しました。現在、広大の私共の研究所では、電子デバイス分野のものづくりの視点から医工連携に臨む立場に立たされています。貴学工学部での貴重な経験を大切に今後も教育研究に研鑽して参る所存です。千葉大学工学部の益々のご発展をお祈り申し上げます。



岩坂正和（広島大学ナノデバイス・バイオ融合科学研究所 分子生命情報科学研究部門）

■ スペインでの共同研究

今年の2月半ばから3月いっぱいにかけて、スペインの（Murcia）ムルシア大学の PABLO ARTAL 先生のところへ、眼の中の前方散乱測定に関する共同研究をしてきました。ムルシアは、バルセロナ、バレンシアの南にあり、地中海から少し離れた内陸にあります。到着して驚いたのは、その暖かさでした。マドリッドでは、冷たい冬の雨が降っているのに、ここではほとんど雨が降りません。アーモンドの花が咲いて、日中は半そででも大丈夫です。ひいていた風邪も治ってしまいました。PABLO先生は、眼光学における様々な測定装置を開発してきました。現在は、光学研究所の所長さんです。先生との出会いは、10年以上まえですが、私が、トプコンの小林さん（現在、帝京大学教授）と一緒に、PABLO先生の開発した眼球光学系



左から Pablo Artal 先生、田代君（宇都宮大）、阿山教授（宇都宮大）、大沼。ムルシア大学 Artal 先生のお部屋にて

の収差解析装置とほぼ同じものを開発していて、学会があり、トプコンがPABLO先生を呼んで、ご講演をしていただくということになり、そのお世話をしたときでした。眼力があり、陽気な感じの先生でした。それから、連絡もしていなかったのですが、突然のメールにも快く、返事をいただけて、訪問のはこびとなりました。私の開発した眼の散乱を測定する装置は、心理物理的方法を用いるものです。一方、PABLO先生のところのGinis先生が、純粋に物理的な方法で、測定する方法を開発していました。そこで、2つの装置で同じ被験者を測定して、同じような結果が得られるかどうかを見たいというのが、私の願いでした。装置が動くようになって、一番驚いたのは、週2回、午後市病院から4名ずつのボランティアの方がいらっしゃって、研究所にあるまだ開発途中の装置や、市販の装置で、測定していることでした。そこに、私の装置も入れてもらえました。なんとラッキー。日本では、とてもうるさくなった倫理委員会のために、こんなことはとても考えられません。測定結果ですが、同じ値とはいきませんが、白内障の眼と、健常者の眼では、大きな差のある結果が得られ、私は、自分の開発した装置が使えるという確信を得ることができました。その時は、喜びで震えが来ました。勿論、まだまだ、問題はありますが、原理はOKです。現在も、私の装置は、PABLO先生のところにおいてあり、Ginis先生と博士の学生のAlex君が引き継いで、担当してくれています。日本にいて、新しいソフトの開発をしては、お二人に試してもらい、助言をもらって、さらに改良の繰り返しです。この9月には、再度、訪問する予定です。最後になりましたが、このような、機会を許していただいた伊藤センター長に感謝いたします。

（大沼一彦 記）

電気電子工学科

■電気電子工学科便り

学科長 鷹野利明先生

工学部改組に伴って新しい電気電子工学科が発足して本年3月で6年が経過し、新学科を経た初めての博士前期（修士）課程の修了生60名を社会に送り出しました。新学科としての安定期を迎えておりますが、今年の大学を取り巻く状況は大変厳しく、社会からはより良き大学への変革が強く求められており、現在、工学部もまた、さらなる改組を模索し始めたところであります。

さて、本年度も本学科の教職員に異動がありました。まず、平成26年3月末日付でシステム数理教育研究分野の平田廣則先生が定年退職されました。平田先生はそこご功績から、千葉大学名誉教授の称号を授与されました。また、同年4月1日付で、システム数理教育研究分野の岡本卓先生が、助教から准教授に昇任されました。さらに、同年10月1日付で、光エレクトロニクス教育研究分野の助手の大矢浩代先生が、電波物理工学教育研究分野に異動するとともに助教に昇任されました。今後、岡本先生、大矢先生ともに本学科における益々のご活躍を期待しております。なお、本稿では、平田先生に退職のご挨拶をご執筆いただいております。

また、本学科の大先輩で、千葉大学名誉教授の大川澄雄先生が、今春、瑞宝中綬章の叙勲を受章されました。本学科としても、大変名誉なことで、誠におめでたく存じます。大川先生には、これを機会に、本稿にお便りをお寄せいただいております。

昨年度の本欄で、本学科が新棟に移転することの報告がございましたが、新棟は平成26年10月下旬には竣工の予定で、その後、11月中には各研究室の新棟への移転が完了する予定です。本稿執筆は10月初旬ですが、すでに新棟の躯体部分は完成し、現在は内装工事が進められております。これまで本学科が入居していた12号棟（旧E号棟）の西側の残存部分は、本年度内に取り壊される予定です。新棟の完成後には、是非、本学科をお訪ねいただき、本学科の新しい教育・研究環境をご覧いただければ、と思います。



■大川澄雄先生よりお便り

この春から間断なく、そして、つい最近はそのとどめを刺すかと思わせる事件が起きた。STAP問題である。本稿の依頼（題材随意）を受けたのは、7月の下旬であるが、初めから、テーマはこの問題に焦点をしばって構想を練っていた。然るに、何たること、構想中、最重要、お一人である笹井芳樹副センター長（理化学研究所）自殺のニュースが8月5日に報じられた。小生の頭の中にあつた原稿は瞬間的にくずれたことは言うまでもない。従って、一時はテーマを全く変えようかと思つたが、素直にいまの思いを書き綴ることにした。

世に、詐欺ごまかしの沙汰は、その種の尽きることはないが、科学・技術の世界では殆ど起こり得ないことである。「殆ど」と書いたのは、歴史上皆無ではないからである。ただ、科学や技術に真剣に取り組んでいる者にとって、ごまかしのようない行為は全く意味をなさないことは肌身で知っているからである。真実だけが生き残る世界だからである。質の違い、影響を与えるインパクトの大きさの違いはあつても、ウソ、ごまかしのない世界である。信頼の世界である。

小生は生物学とは無縁の人間で、まして、小保方晴子研究ユニットリーダーに関しては、マスコミ報道以外の知識は何一つ持たない。しかし、今回の事件は、信頼は裏切られるためにあるというレトリックを思いおこさせる。なぜなら、この信頼が裏切られたのではないかと、と思わせる報道論調が大半だったからである。

科学や技術の発展は、科学者や技術者のお互いの信頼の上に成り立っている。これは何も科学・技術上の論理や客観性に対してばかり当てはまるものではなく、科学者や技術者の所属する組織に対しても言えることである。ひとを信じ、組織を信じて研究にいそしんでいる。これが、科学者、技術者の姿である。

笹井氏を死にまで追いやつたものは何なのか。小保方女史に、「STAP細胞はあります」と絶叫させたものは何であつたのか、信頼を取り戻すためにはっきりさせてもらいたいものである。



■退職雑感

平田 廣則 先生

本年3月31日付をもちまして定年退職致しました。

昭和51年12月から37年4ヶ月の間、長期にわたり自分勝手ともいえる研究生生活を送ることができましたことは、ひとえに皆様のご理解と千葉大学・工学部の寛容な精神によるものと感謝致しております。

修士2年の秋から、ひよんなことから「生態システム」に出会い興味を持ち、博士課程はもっぱらその方向で進みました。現在の国立環境研究所も国立公害研究所と呼ばれ、「環境」という言葉がまだ一般に社会認知されていませんでした。現在なら複合領域などと言って問題はないと思いますが、当時日本広しといえども工学部において純粋な生態系を研究テーマにしている人間は皆無でした。

大規模システムの研究という看板の下ではありましたが、工学部らしからぬ研究テーマを許容頂いたこと、また現在のように海外渡航が当たり前の状況でない時代に度々の海外渡航をお認め頂いたことは、今振り返り改めて感謝の念に堪えません。

ワシントンD.C.近郊のメリーランド大学附属の風光明媚な海辺に面したチェサピーク生物研究所に2年弱、その後オランダ、オーストラリア、カナダへの3回の日本学術振興会特定国派遣研究者（短期）プロジェクト、その他国際会議等での渡航期間が、助教授在任13年間の内3年弱にも及ぶことが、定年時の自己の過去精算において再認識するに至り、如何に皆様方にご迷惑をおかけしてしまったかと、遅まきながら反省致しております。

その後も種々のわがままが続き、最終講義においてその極みを見てしまいました。「人生の転機・自然体（脱力）の効用」の題目で、予定時間を大幅に超えて2時間以上にわたり、二人の助っ人の支援の下、実演入りでやらせて頂き、これが最後の身勝手となりました。

赴任時は電気工学科、その後電子工学科に移り、幾多の改組により電気電子工学科、電子機

械工学科、はたまた電気電子工学科と、私は電気系全ての学科に所属することになりました。現在、大学の変革・改組が動き出しているやにお聞きします。私自身は非常に保守的な現状維持の人間で、物事が変化することは好みません。しかしながら新しいことを受け入れてみなければ、今以上の素晴らしいことに出くわすことはできません。引き返す勇気を持って、新しい道を進んでみる必要があるかと思えます。ただその新しい道は、将来その道が正しかったかどうかを評価できる方々で決めていくべきだとは思いますが。

私の場合は武道を通してにすぎませんが、この歳になりやっと、自然であること、心身ともに自然体であることが如何に難しいかを思い知らされています。

「己を知る」ことがどんなに重要でかつ必要であるかを。如何に生き物・人間としての自分の心身を知らなさすぎたかこの歳になって気づいた有様です。誤解されては困るのですが、何も聖人君子になりたいと思っている訳ではありません。少しでも人間の体、特に心身のつながりを理解し、自分をもっと良く知り自己をコントロールでき、少しでも本来人間が持っている隠れた能力を実感できるようになりたいと思っている今日この頃です。しかし瞬間湯沸かし器の自分においては、それは朽ち果てるまでに実現できそうにないというのが実情と思われれますが。



最終講義の1コマ、写真左：河村洋平氏（千葉大・電気電子工学科）、写真右：照沼慎吾氏（フジクラ㈱）、写真中央：筆者

ナノサイエンス学科

■ ナノサイエンス学科だより

学科長 石井 久夫

平成20年にスタートしたナノサイエンス学科も7年目を迎えました。この3月には、3期生が無事に卒業し、4月には7期生40名（マレーシア政府派遣留学生1名を含む）と3年次編入生2名を迎えることができました。例年の通り、入学式よりも前に新入生と編入生をガイダンス合宿に連れて行きました。写真は、つくばの高エネルギー加速器研究機構（KEK）の見学の様子で、千葉大OGの酒巻真粧子博士にシンクロトン放射光実験施設の実験ホールを案内してもらっているところです。今年は元気に質問をする新入生が多く、これからの成長をとて楽しみにしております。教員の方は、いろいろと動きがあり、3月末で解良聡准教授が分子科学研究所の教授に榮転し、上野信雄教授が定年退職されました。寂しくはなりますが、解良先生には客員教授として、上野先生には特別教授として、引き続き学科の研究・教育をお手伝いいただいております。また、画像科学科の小林範久教授がナノサイエンス学科にうつり、研究教育をサポートしていただいております。もともと教員数が少ないナノサイエンス学科ですが、これらの先生方のご協力も得て、引き続き研究・教育活動に励んで参りますので、同窓会の皆様にも是非ご支援のほどよろしくお願い申し上げます。



■ 解良 聡先生の転出のご挨拶

平成26年4月に分子科学研究所、総合研究大学院大学に教授として赴任いたしました。学生時代から数えて23年間にわたり千葉大学にお世話になりました。その間、機能材料工、物質工、電子機械工、ナノサイエンス学科と学科変遷の波に揉まれ、またグローバルCOEプログラム運営など、先導的かつ国際的な多くの経験をさせていただきました。大学キャンパスや諸設備は私の学生時代と比べると隔世の感があり、この十数年の間に相当改善されたように思います。残念なことは学内における紳士協定で許されていた「自由」が諸々成立しなくなったことでしょうか。工学同窓会では委員として活動してきましたが、よもやこの様な形で記事を執筆するこ



とになるとは、想像しておりませんでした。多くの先生方のご指導ご鞭撻のおかげと感謝しております。今後は外部からになりますが、微力ながらも母校の発展に貢献できればと思います。分子研は人が少なく、静かな環境の印象です。近くにお越しの際には是非お声をおかけ下さい。千葉大学にもしばしば顔を出しますので、よろしく願いいたします。

■ 野口 裕先生の転出のご挨拶

平成25年度末で、7年間お世話になった千葉大学を退職し、明治大学理工学部電気電子生命学科に准教授として赴任いたしました。千葉大学在職中、教育面ではナノサイエンス学科の発足、先進科学プログラムの拡充、研究面ではグローバルCOE等、本当に多くの経験をさせていただきました。特に、石井先生には研究室立ち上げの大事な時期に採用して頂き、教員を含めて7名から始まった研究室が20名を超す大所帯に成長するまでの、貴重な過程を経験させていただきました。多くの方々を支えられ、充実した7年間で過ごすことができたこと、大変感謝しております。明治大学では研究室を主宰する立場になります。研究室名は「有機分子エレクトロニクス研究室」としました。研究分野は変わりませんので、これまで通りお世話になる先生方も多いかと思っております。私学ということもあり、環境は大きく変わりますが、千葉大学での経験を活かし、活躍できるよう精進していく所存です。今後ともよろしくお願いいたします。



■ 上野信雄教授の最終講義と退職記念会

ナノサイエンス学科、上野信雄教授が平成25年度で定年退職されました。平成26年3月13日（木）に本学の総合校舎B号館にて、学内向けの最終講義をしていただきました。4月26日には、新たに学外の先生方、千葉大学の関係教職員、研究室卒業生の皆様にお集まりいただき、上野信雄先生の退職記念会が学士会館でおこなわれました。出席者は約100名を超え、会は大盛り上がりでした。千葉大学の先生方、また学外から先生と関係の深い先生方、上野研究室のOB、OGからスピーチをいただきました。最後に先生と奥様に花束、記念品贈呈があり、上野先生を囲んで和やかな雰囲気での記念パーティでした。（奥平幸司 記）



共生応用化学科

■ 共生応用化学科近況

共生応用化学科の卒業生の皆様、そして前身である合成化学科、工業化学科、応用化学科、機能材料工学科、物質工学科の卒業生の方々の第V部会および同窓会に対する日頃のご支援に深く感謝いたします。

運営交付金が毎年削減され、国立大学の予算は厳しい状況にあります。研究を行うには外部資金の獲得が重要になります。幸いにも、当学科では文部科学省の科学研究費補助金（科研費）の新学術領域「超高速バイオアセンブラ」（関実教授・山田真澄准教授）、科学技術振興機構（JST）の戦略的創造研究推進事業（CREST）「革新的塗布型材料による有機薄膜太陽電池の構築」（矢貝史樹准教授）、新エネルギー・産業技術総合開発機構（NEDO）の「固体高分子形燃料電池実用化推進技術開発／基盤技術開発／低白金化技術」（星永宏・中村将志准教授）の大型予算が入って活発に研究が行なわれています。これ以外にも、多数の教員が、科研費・企業との共同研究費・奨学寄附金を得て、研究の活力を上げています。

研究系の大学の使命である論文発表に関しても、*Nature Communications*, *Angewandte Chemie International Edition*, *Journal of the American Chemical Society*などのImpact Factorが10を超える著名な学術誌に多数の論文が掲載されています。また、斎藤恭一教授の研究グループが開発した「原発内の汚

染水処理に役立つCs/Sr吸着繊維」は、福島第一原発汚染水の新しい多核種除去設備（高性能ALPS）の部材として採用され、活躍します。当学科の研究成果は基礎・応用の両面で社会に貢献しています。

受賞に関しては、平成26年6月に開催された「シンポジウム モレキュラー・キラリティー 2014」において、坂本昌巳教授が「アキラル分子の不斉結晶化と不斉合成への応用」に関する業績で分子不斉研究機構より「Molecular Chirality Award 2014」を受賞しました。この賞はノーベル化学賞の野依良治氏も受賞した権威あるものです。また、2013年11月には大窪貴洋助教が第45回溶融塩化学討論会において溶融塩奨励賞、桑折道済助教が2013年3月に日本化学会から若い世代の特別講演賞、同年5月に高分子学会から高分子研究奨励賞を受賞し、若手教員も大いに評価されています。これに呼応するように、大学院生の学会でのポスター賞・優秀講演賞などの受賞数は、2013年10月から2014年9月の1年間でのべ33件に上ります。国立大学法人の第二期中期目標期間は2015年度で終了し、2016年からより厳しい第三期中期目標期間に入ります。教員と学生が互いに刺激し合って、独創的で有意義な研究成果を生み出す教育・研究環境をより強固なものにし、厳しい時代を生き抜きたいと思えます。

（学科長 星 永宏）

■ 掛川一幸先生の最終講義および退職記念会

掛川一幸先生は、平成26年3月末をもって定年退職されました。先生は、昭和42年4月に本学工学部に入学され大学院工学研究科修士課程を修了後、昭和48年4月より助手として着任されました。それから41年間、本学工学部での教育研究のみならず、千葉大学ベンチャービジネスラボラトリーでのプロジェクトの運営を初め、日本化学会・日本セラミックス協会・無機マテリアル学会を初めとした様々な学協会においても活躍になり、無機材料化学の発展に寄与する多くの功績を残されてこられました。先生の最終講義および退職記念祝賀会は、3月9日に東京・如水会館にて行

われました。最終講義では「セラミックスとともに45年」と題し、学生時代から現在までのご自身の研



究について、卒業研究や修士および博士課程の研究として指導された学生さんの思い出とともにお話をされました。卒業生の方々も先生のお話に懐かしさとともに聞き入っておられるようでした。先生は退職後、千葉大学フェローとして、工学部展示室において歴史的な機械や面白い現象の紹介を通して科学の啓発に更なる尽力をされております。これまでのご指導に感謝申し上げますとともに、先生のご健康と益々のご活躍、ご発展をお祈り申し上げます。

(上川 直文・小島 隆 記)



■ 袖澤利昭先生のご退職に寄せて

袖澤利昭先生は、2013年3月31日をもって定年退職を迎えられました。袖澤先生は、1978年8月に千葉大学工学部工業化学科化学工学講座に助手として着任されて以来、35年8ヶ月間に渡って奉職されました。在職中は固体触媒を利用して、C1化合物の有用化合物への転換反応、天然ガスの有効利用、NOx、SOxの無害化等のご研究をされておりました。

先生の退職記念祝賀会は2014年2月28日に千葉大学内のレストランコルザで行われました。研究室のOB・OGにも多数参加していただきました。OB・OGや在学生から袖澤先生についてのエピソードが語られ、当時や最近の袖澤先生のご活躍ぶりが皆様に伝わりました。

ご退職後も、千葉大学のグランドフェローとして学生相談室や国際教育

センターで講義を担当され、また千葉工業大学非常勤講師として講義をされ、放送大学千葉学習センターの非常勤講師としても講義および実験をご担当されております。今後ともご健康に留意され、ご活躍されることを祈念致します。

(佐藤 智司・山田 泰弘 記)



■学生の授賞（平成25年8月以降）（敬称略）

新井香純、池田景虎：第50回アイソトープ・放射線研究発表会 若手優秀講演賞／田口裕之：第57回香料・テルペンおよび精油化学に関する討論会 第11回ベストプレゼンテーション賞／新出 挙：第29回日本イオン交換研究発表会 ポスター部門優秀賞／岡村 諭、山内光陽、千葉陽介、倉田紘樹、赤松達也、池ヶ谷誠斗、鈴木美香、川口皓奨、南日優里、高麗寛人、神田 僚：第3回CSJ化学フェスタ2013 最優秀ポスター賞および優秀ポスター賞／河野通亮：第27回日本吸着学会研究発表会 優秀ポスター賞／紺野琢磨、Loo Chi Wern、小野潤哉、鎌田美紀、田中佑弥：日経テクノルネサンス・ジャパン（村田製作所賞） 優秀賞／Kim Jungpil：第40回炭素材料学会年会 ポスター賞／岡 優香：第6回テクノルネサンスジャパン（東レ賞） 優良賞／北川陽一、岩瀬優輝：Asian Congress on Biotechnology 2013 Best Poster Award (1st Prize) およびBest Poster Award (2nd Prize) ／矢嶋祐也：化学とマイクロ・ナノシステム学会第28回研究会 優秀ポスター賞／佐々木祐亮：第23回日本MRS年次大会 奨励賞／濱田紘佑：関東高分子若手研究会2013年度論文発表会 優秀ポスター発表賞／山内光陽、南日優里、川島 青：なのはなコンペ2014（学生版）受賞／山内光陽：なのはなコンペ2014（学生版）特別賞（絆賞）／小西菜穂：第31回千葉地域活動高分子若手セミナー ポスター賞／海野理：化学工学会第79回年会 本部大会学生賞／後藤聖太：日本海水学会第65年会 学生優秀賞／川島 青、高橋佳苗：第15回放射線プロセスシンポジウム 優秀賞および奨励賞／山内光陽：NIMS CONFERENCE 2014 Best Poster Award／Jungpil Kim：Carbon2014 KCS Student Award

（斎藤恭一 集計）

■共生応用化学科・専攻就職状況報告

今春（平成25年度）の当学科卒業生は105名であり、多くの学生が無事、進路を決定することができました。その内訳は当専攻への進学者が80名、他大学院への進学者が6名となりました。当専攻への進学率は76%、全体で82%の学生が大学院へ進学したことになります。一方、就職した学生は12名おり、そのうち1名が公務員として市役所の行政職に採用されています。民間企業の就職先は、化学系、自動車関連、エネルギー関連、商社、サービス業と多岐にわたっています。就職率は卒業生全体の11%であり、平成24年度の20%と比べると減少し、大学院への進学率が増加しています。残りの7名は、帰国して就職活動を行う留学生、公務員を再受験する学生、本学研究生となって大学院再受験を目指す学生などです。

博士前期課程（修士）修了生は78名おり、4名は当専攻博士後期課程へ進学しています。就職した学生は73名おり、そのうち70名が民間企業へ、残りの3名はそれぞれ海上自衛隊、東京都庁、当学科の技術職員への就職でした。なお、修了生のうち1名は公務員を再受験する予定です。全体の就職率は94%となります。

民間企業の職種は化学系が圧倒的に多く、ほとんどが化学材料や触媒の製品開発といった専門性が要求される分野となっています。企業は多岐にわたりますが、知名度の高い大企業とその関連企業が主となっています。今年度は10社もの企業から複数名を採用してい

ただいており、当専攻の学生のよさを認知していただいていると思います。また、学生にとっては望んだ企業への就職の道が拓かれていることにもなります。

博士後期課程（博士）修了者が3名おり、民間企業へ1名が就職し、残りはポスドクなどとしてアカデミックポディション獲得の機会を狙っています。

平成26年度の就職状況は、比較的順調に進んでおり、就職希望で内々定取得に至っていない博士前期課程（修士）の学生は6%（公務員希望を含む）となっています。当専攻は「推薦」に対して厳格に対応しており、学生・企業の皆様に有効にこの「推薦」を活用してほしいと思っています。また博士後期課程（博士）進学者が2名います。一方、学部卒業予定者の84%が当専攻の博士前期課程（修士）への進学を希望し、81名が合格しました。残念ながら、当大学院に不合格となった学生は他大学院の受験や就職活動への変更を考えています。また他大学の大学院に合格した学生も2名おります。

本原稿の執筆時も就職活動を続けている学生がおります。さらに来年度からは会社説明会の開始が3月から、面接・試験などの選考の開始が8月からと就職活動の時期が遅くなり、短期決戦になります。教員一同、一層の学生支援に努めるとともに、卒業生・修了生の皆様からのご協力を賜りますようお願い申し上げます。

（三野 孝記）

画像科学科

情報画像学科

■ 画像科学科の近況

学科長 久下謙一

【学科近況】

改組により画像科学科が発足して7年目を迎えました。教育・研究の新しいプログラムを軌道にのせるべく奮闘していますが、世の中の動きは速くて、文科省の「国立大学改革プラン」に沿った大学の機能強化が求められ、次の改組が計画されています。現在、学部は工学部、大学院は融合科学研究科という体制ですが、融合科学研究科全体が大きく変わる可能性があり、それと連動した工学部の改組も今度どのような形になるのか、今のところまったく見とおせない状況です。

改組と関連して、画像マテリアルコースが関係する分子キラリティ研究センターの設置が概算要求で文科省をとおり、財務省に行くことになりました。財務省での査定がどのようになるかはわかりませんが、今後に期待したいと思います。

【学科教職員の動向】

今年3月には、学生時代を含めると千葉大生活50年近くになる小関先生が定年退職されました。来年3月には小林裕幸、立田両教授も定年退職されます。定員削減のため、これらの先生方の代替わりの予定が無く、現在の教職員だけで抜けられた穴を埋めるという、多忙な状態がしばらく続きそうです。小関先生にはグランドフェローとして引き続き授業や学生実験の一部をご担当いただきお礼、感謝に堪えません。

【画像科学科の取り組み】

今年もグローバル人材育成の一環として、「画像化学に関するアジア学生ワークショップ2014」など、引き続きアジアを中心とした海外との交流を進めています。今年はいくつかのタイのチュラロンコン大学、キングモンクット大学トンプリ工科大学、マレーシアのマラヤ大学に加え、トルコのイスタンブール工科大学、イリディス工科大学が加わりました。学生を中心とする相互交流が、高原准教授をチーフに学科一丸となって盛んに行われています。また、政情不安に対応した危機対応マニュアルを作成するなど、交流事業の整備も着々と進められています。

昨年より新設したe-learningを取り入れた工学国際英語も、1年のセミナーで学習方法を習熟させるなど、きめ細かい対策を続けています。基礎を重視したカリキュラムの改革も3年目です。年次進行のため、現在3年生まで新しいプログラムに切り替わっています。この成果が来年の卒業研究以降につながることを期待しています。

学科の取り組みや最新情報などは下記の学科ホームページに記載されておりますので、お時間がありましたら是非ご覧いただきたく、お願いいたします。

(画像科学科URL：<http://www.tp.chiba-u.jp/>)

■ 情報画像学科の近況

学科長 堀内隆彦

情報画像学科は、この4月、新たに7期生を迎えました。また、大学院へ進学した1期生がこの3月に博士前期課程を修了し、6年間の教育を経て、社会へ巣立っていきました。震災以来、就職環境が思わしくなく、進学率、就職率ともに苦戦を強いられた期間が続きましたが、今年度はそれぞれ回復し、明るい兆しが見えています。就職先も、情報系、映像・画像系、それらを融合したサービス産業など、本学科の特色を反映した企業が多く、本学術分野を修学した学生に対する社会的な需要は、依然として高いことが感じられます。日頃より、同窓の皆様におかれましては、求人等で多大なるご支援および格別のご高配を賜っており、改めてお礼申し上げます。

さて、今年3月には、2004年度より10年間にわたって本学科の教育・研究にご尽力いただきました阪田史郎教授が定年退職されました。3年続けて教授が定年退職されたことは、学科の教育・研究において不安視されるころもありましたが、経験と実績豊かな教授陣と、エネルギー溢れる若手教員が一丸となって学科運営に取り組んでいます。昨年度、サバティカル研修制度を利用して、長期の海外研修（ベルギー・アントワープ大学、イタリア・トリノ工科大学）をされていた須鎗弘樹教授は、無事研修を終えて戻られ、早速4月よりご活躍いただいています。この2年間で、合計4名の教員が長期海外研修の経験を積まれたことから、本学科の教育・研究に対して、今後より一層ご貢献いただけることが期待されます。

また、本学は一昨年よりグローバル人材育成推進事業に採択され、英語力の強化、留学制度の推進が図られており、それにともなって本学科でもそれらの取り組みを実現するための入試改革、教育改革を始めています。編入学入試、大学院入試ではTOEICの受験を必須として、評価しています。研究室の配属にも、学部で導入したe-learningシステムの修学状況を考慮するなど、英語教育に取り組むモチベーションをあげる仕組みを整備した結果、TOEICの点数が順調に伸び、工業英検では優秀な成績により、文部科学大臣賞を受賞した学生もいました。海外留学をする学生も増加し、着実に意識の変化が見られ、グローバル教育の効果が現れ始めています。今後も、専門教育とあわせて、力を入れていきたいと考えています。

本紙面ではご紹介できなかった学科の取り組みや、教育・学生の実績等の最新情報につきましては、下記の学科ホームページに記載されておりますので、お時間がありましたら是非ご覧いただければ幸いです。

(URL：<http://www.tj.chiba-u.jp/>)

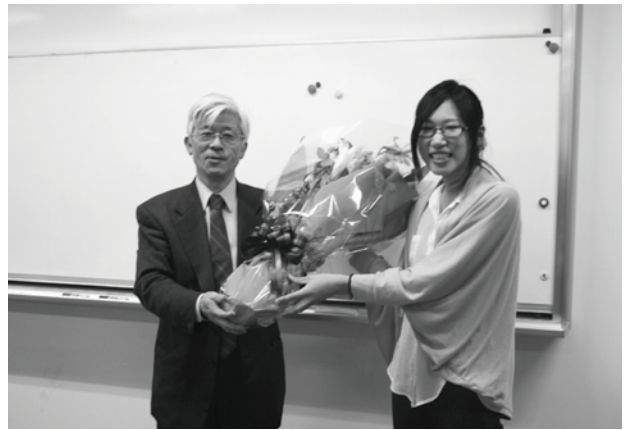
■ 阪田史郎教授最終講義

情報画像学科教授の阪田史郎先生が2014年3月で定年退職されました。ご退職されるにあたり、3月8日に「情報通信ネットワーク企業で30年、大学で10年」と題して、千葉大学アカデミック・リンク・センター1階コンテンツスタジオ（ひかり）において90分最終講義が行われ、学内外から70名を超える方々のご出席がありました。

阪田先生は、1974年に早稲田大学大学院理工学研究科を修了され、1974年～2004年までの30年にわたって、日本電気株式会社において研究に携わってこられ、1996年～1999年にはパーソナルC&C研究所、1999年～2002年にはインターネットシステム研究所、2002年～2004年には中央研究所の所長をそれぞれ務められました。2004年4月に本学に着任され、以来10年にわたって、本学の教育、研究に多大なる貢献をいただきました。

最終講義では、長きにわたるご自身の研究成果に関して、丁寧にご説明いただきました。

先生は、企業では主にコンピュータネットワーク、マルチメディア通信、ユビキタスネットワークシステムなど通信とコンピュータの融合領域の研究に取り組み、大学では主にモバイルアドホック、センサネットワークの中核技術およびその災害支援、省エネへの応用などに



関する研究に取り組みました。企業と大学で研究に取り組まれた体験談を通して、先生の研究への取り組み方に対する非常に興味深い講義を拝聴することができました。最終講義の後、けやき会館コルザに場所を移して懇親会が開催され、多くの方々にご出席をいただきました。

阪田先生はご退職後、大学院融合科学研究科のグランドフェローになられました。これまで先生が培ってきたご経験を活かし、千葉大学にご貢献されています。

阪田先生の今後の益々のご活躍とご健勝をお祈りいたします。

(小室 信喜記)

■ 小関健一教授最終講義のご報告

画像科学科教授の小関健一先生が2014年3月で定年退職されました。小関先生の最終講義は、3月13日（木）に千葉大学ベンチャービジネスラボラトリー3F会議室で『フォトポリマーとともに』という題で行われました。当日は、激しい雨という悪天候であったにも関わらず、60余名ものOB、OG、学外関係者、また学内スタッフの聴講で賑わいました。

小関先生は、千葉大学工学部写真工学科（工学研究科写真工学専攻）をご卒業され、1975年4月に千葉大学工学部印刷工学科の助手として着任して以来、実に39年もの長きに亘って千葉大学工学部で教鞭を執られ、教育・研究活動にご尽力下さり、数多くの卒業生を巣立たせております。学協会においても、理事や委員等を歴任され、画像分野の発展に尽くされました。

最終講義では、芳香族アジド、過酸化剤、クマリン系色素をはじめとする感光性材料のご研究、またマイクロカプセル液晶を用いた表示材料のご研究、フォトポリマーを用いたホログラム記録材料のご研究等、長きに亘る一連のご研究を判りやすくお話し下さいました。もっと長くお話を伺っていたい、そんな気持ちになるご講義でした。先生のご在籍中は、工学部棟の建て替え等で研究室の場所がたびたび移動となりましたが、その様な



様々な研究の場を、例えばプレハブの実験室等、お写真を交えお話し下さったことも印象に残っています。

小関先生はご定年後、2014年4月より、千葉大学のグランドフェローとして、普遍教育（昔の一般教養課程）の画像工学入門のご講義や、画像科学科の学生実験にご協力頂いています。これまで先生が培ってきた教育のご経験を活かし、画像科学科をはじめ千葉大学にご貢献されています。

小関先生の今後の益々のご活躍とご健勝をお祈り致します。

(星野 勝義・宮川 信一記)

■ 中村佐紀子助教ご定年のご報告

画像科学科助教の中村佐紀子先生が2014年3月で定年退職されました。教務職員としてお仕事に就かれ、また1998年より助教（当時は助手）として、長きに亘り画像科学科で教育・研究にご尽力下さいました。同窓生の皆様には、この場を借りてご定年のご報告をさせていただきます。学科としては非常にささやかではありますが、送別会を開かせて頂き、花束贈呈を行い感謝の意を表させていただきます。中村先生の今後の益々のご健勝ならびにご活躍を祈念致します。

（星野 勝義・宮川 信一記）



■ サバティカル研修の勧め

須鎗弘樹

以前読んだ大前研一の次の言葉はとても印象的で、今でも覚えています。「人間が変わる方法は3つしかない。1番目は時間配分を変える。2番目は住む場所を変える。3番目はつきあう人を変える。この3つの要素でしか人間は変わらない。」この言葉に照らしてみれば、サバティカルは、これら3つをいずれも体現できる経験であったと思います。

千葉大学のサバティカル研修制度の機会に恵まれて、2013年度の最初の6ヶ月はアントワープ大学（ベルギー）に、後半の6ヶ月はトリノ工科大学（イタリア）に滞在しました。私の研究分野は、情報理論と複雑系の境界領域にあり、世界各地に研究者がいるのですが、そのなかでも、自分とは研究のバックグラウンドが異なり、重要な研究をされている方の大学に滞在することにしました。どこの大学教員でも、教育と研究と業務の3つが大きな仕事ですが、私が滞在した上記の2つの大学では、いずれも教育と研究の比率が非常に高く、日本の大学でいうところの業務のほとんどを事務か研究室秘書が担当しているようでした。

ヨーロッパの大学は、1999年のボローニャ宣言に当たって、学士課程が3年間しかありません。これは、ヨーロッパの大学間での単位互換性ゆえですが、学部が3年しかないことにより、ほとんどの学生が修士課程（2年）に進学します。そのため、3+2=5年間の一貫教育のカリキュラムになっており、研究への比重がとて大きくなっています。これは欧米のなかで常に研究競争にさらされており、博士課程に進学する学生は、より優れた研究をしている研究室（他国も含めて）に移ることが多いようです。その意味でも、教員には優れた研究が常に求められており、それにより、外国からも優秀な学生を自分の研究室に引きつけ、さらに良い研究をするという循環ができています。学生も、良い研究業績をあげることで、次のグラントとポジションを獲得することができるため、同じ研究室内で多国籍状態、かつ、常に競争にさらされている様子でした。実際、どちらの大学でも、教員も学生（研究室内）も、朝9～10時ぐらいから夕方4～5時まで、皆、研究に集中し、飲み会やパーティなどは、ほとんどありませんでした。

一方、教育については研究と同じくらい比重が高いと感じました。アントワープ大学では、博士課程の学生のほとんどは、大学から奨学金として給与をもらっているため、アルバイトなどをする必要がなく大学で研究に打ち込むことができ、同時に、学部低学年の授業などをとても熱心に担当していました。実際、彼ら博士課程の学生は大学のカリキュラムについて精通しており、カリキュラムに関する会議も議長を勤めるなど、日本の大学では考えられない深い関与です。このような教育経験も博士号取得の重要な要件の一つになっているとのこと。一方、トリノ工科大学では、大学教員の授業の責務は非常に大きいようです。特に、学部1年生の授業では、どの授業も約400名ほどの受講生がおり、それら講義室はどれも映画館のような大きな階段教室で、最後尾まで満席の状態でした。受講生は、単位取得のために、合計3回の試験に合格する必要がある、1回目は基本的な内容のペーパーテストでふるいにかけられ、2回目は標準的な内容のペーパーテストでさらにふるいにかけられ、3回目は、ここまでに残った受講生を担当教員が個別に口頭試問をする（黒板上で問題を解かせる）という徹底ぶりです。最終的に、授業の単位を取れるのは、初めの受講生の1/3以下らしいです。研究にしても教育にしても、教員も学生も厳しい競争下にあると思いました。

本稿の最初に述べた言葉に照らして、帰国後の5ヶ月間余り（本原稿執筆時点）を振り返れば、現在は、サバティカルに出発する前の自分に戻ってしまったような感慨もなくはありません。「郷に入れば郷に従え」という言葉がありますが、少なくとも研究のため海外で長期滞在を経験した者は、その貴重な経験とともに、同じ時間を全く異なる時間配分で過ごしている欧米の研究者のことを忘れてはいけません。そして、千葉大学のサバティカル研修制度の権利を有する教員は、無理をしても活用されることを強く推奨します。

最後になりましたが、このような貴重な経験を与えてくださった千葉大学、サバティカルが実現できるように支援してくれた知能情報コースの先生方、不在期間中の業務を代わりに担当していただいた先生方、担当授業（情報理論、符号理論）を担当していただいた中村勝洋先生（千葉大学グランドフェロー）に深く感謝したいと思います。

■第41回 高潮展開催のご報告

第41回目となる高潮展は、2014年4月30日～5月6日にかけて目黒美術館/区民ギャラリーで開催され、盛況の裡に終了する事ができました。ご来場者はじめ、ご協力いただきました皆様に、この場をお借りして御礼申し上げます。今回は、従来のタブロー作品に加えて、ディスプレイやビジュアルデザインの世界で活躍するアーティストの作品が展示され、会場を彩りました。

出品作品の内訳を見ると油彩、水彩、パステル、水墨、アクリル、版画、写真、ビジュアルデザインなど、画種が広がり、80点を越す作品の集合となりました。会場の一角には「素描コーナー」が設けられ、初回ながら20点を越す様々な小品が来場者の関心を集めました。

扱、高潮展は出品者の漸減という課題に直面しておりますが、課題の解決を含め、より良き運営実現のために「高潮展を良くする出品者アンケート」を実施し、目下集計中です。

いずれ次年度第42回展の募集要項と併せて、この場で、集計結果を公開する予定です。

尚、第42回高潮展の会期は、2015年3月10日（火）～15日（日）と決定いたしました。日頃、アート作品の制作に勤んでおられる工学部同窓生の皆様のご参加をお待ちいたします。

高潮展代表 下田 常三（意匠2回卒）

同事務局長 宮智英之助（意匠8回卒） / 〒362-0075 上尾市柏座3-2-6-1106

Tel/Fax : 048-770-6929、Mail : pathos@ff.em-net.jp



第41回高潮展 2014年5月6日 於：目黒美術館区民センター

■ 凡展

「第25回凡展」は平成26年9月28日（日）から10月4日（土）までの7日間、東京都有楽町の東京交通会館2階ギャラリーで開催いたしました。

凡展も今年度で第25回を迎えることが出来ました。この節目にあたり、今回は「第凡展25回記念誌」の発行も予定しています。

凡展には工学部の同窓生の諸先輩の方々毎回50名以上参加しています。内容は絵画とそれ以外の作品とがほぼ半々で、写真、CG、書、立体造形などのユニークな作品群が、この凡展を特徴付けています。

会期中は、出展者を中心に、それぞれのクラスの集いや、先輩・後輩が出会う楽しい交流の場ともなっています。

工学部同窓生の方はどなたでも出展いただけます。諸兄姉もお仲間になりませんか。

同窓会皆様の日頃のご協力を感謝しておりますとともに、今後ご支援くださいますようお願い致します。



第24回 凡展 平成25年9月29日 於：東京交通会館

凡展代表 森 崇（専建3回卒）

凡展事務局 佐藤 貢（大意21回卒）

〒274-0825 千葉県船橋市前原西4-3-11

電話 047-477-4582

メール charinko2010@nifty.com

■ 松芸展

「松芸展」は今年も2月に西新宿エステック情報ビル内クリスタルスポットで第5回展が開催されました。同窓生を中心に200名弱のご高覧いただきありがとうございます。次回は平成27年2月14日から20日まで同じ場所で開催されます。先輩、後輩の交流の場でもありますので是非お立ち寄り下さい。「高潮展」「凡展」と併せてご愛顧お願いいたします。

「松芸展」の出展者は顧問 森崇(1947年卒)、代表 安生満(1954年卒)をはじめとして現在は15名の構成です。作品は油彩画、水彩画、水墨画、日本画、版画など平面作品で展示しています。

「松芸展」の由来は東京高等工芸の「芸」と東京の芝浦から戦後移転した松戸の「松」からとった名称です。「松芸展」には松戸出身者に限らず西千葉で育った方も建築同窓生なら参加できます。

参加ご希望の方は右記事務局までご連絡下さい。



松芸展事務局 和田 為義(1963年卒)
〒195-0055 町田市三輪緑山2-9-7
090-4741-6732

■ 工学同窓会アーカイブス

東高芸の会からの提案を受けて工学同窓会にアーカイブス委員会が発足して早2年が経ちました。しかし、今のところ殆ど利用されていません。周知されていないためと思われるので、紙面を借りて紹介させていただきます。

工学同窓会アーカイブスでは、会員が所有する在学中や卒業後の活動記録をはじめ、関連する文献、書籍や就職先業界の有為転変に関わるカタログやサンプルなどの寄贈を受けて、これら貴重な資料の散逸や消失を防ぐことを目指しています。また、寄贈された資料の有効活用を図ることも努めます。ただし、収蔵場所が松蔭会館内の工学同窓会事務局の一部でもあり、スペースの関係で大きなものは受け入れることが困難です。

寄贈の申込みをされるときに、できましたら寄贈品がどのようなものであるのか、その由縁がわかるような覚書などを添付していただくと、寄贈品の受け入れの判断をするときに大いに参考になりますし、寄贈を受けた後に有効に活用するに当たっても利するところが大きいと思います。

寄贈をお考えいただける方は下記の工学同窓会事務

局に問い合わせ下さい。なお、詳細についてはお問い合わせいただくか、下記URLをご覧ください。

千葉大学工学同窓会

〒263-8522 千葉市稲毛区弥生町1-33

千葉大学工学部松韻会館内

事務担当 甘利 節子

電話/FAX 043-254-6358

E-mail: chiba-u.kogakudosokai@nifty.com

URL: <http://chiba-kougaku-dosokai.jp>

(八代健一郎 記)

事務局からのお願い

事務局では、工学同窓会会報を保存しています。残念ながら、第0号から第4号までは紛失しております。特に、第3号については写しすらありません。もし、これらの号をお持ちの方で寄贈頂ける方はご連絡ください。よろしくお願ひ申し上げます。

平成25年度工学同窓会事業報告

平成25年4月1日から平成26年3月31日までの事業報告をいたします。

1. 工学同窓会会報の編集・発行

第40号（30ページ、約25,000部）を11月中旬に発行、会員の皆さまに発送しました。

2. 平成25年度総会・懇親会報告

平成25年5月31日（金）浦安ブライトンホテル1階フィーストの間において総会・懇親会が開催されました。例年とほぼ同数の110名の方々にご参加をいただきました。平成25年度より会長となられた塩田孝夫会長のもと、平成24年度事業報告、収支決算報告、会計監査報告、平成25年度事業計画、予算などが承認されました。また、平成25・26年度の役員が紹介されました。引き続き懇親会が開催され、北村彰英名誉会長（工学部長）からご挨拶、野口博先生（前工学部長）の乾杯の辞を頂きました。平成24年度の学生支援を受けたソーラーデカスロンへの参加学生による成果報告、千葉大学マンドリン部による演奏が披露されるなど和やかな交流の場となりました。



3. 学生活動への支援

フォーミュラ、ロボコン、iGEM、パルスジェット、東京デザイナーズウィーク、都市環展、CUAD、建築卒業展への支援を行いました。

4. 卒業生・新入生への記念品の贈呈

男性卒業生623名にネクタイピン、女性卒業生131名にリングを贈呈しました。また新入生には入学記念品（多色ペン）を贈呈しました。

以上

●平成25年度 ●千葉大学工学同窓会 決算

■収入の部

(単位：円)

費目	予算①	決算②	①-②
前年度繰越金	804,505	804,505	0
入会金	6,600,000	6,670,000	△70,000
会費	2,200,000	2,289,000	△89,000
寄付金	2,500,000	2,457,000	43,000
総会参加費	120,000	108,000	12,000
利息・雑収入	5,000	714	4,286
合計	12,229,505	12,329,219	△99,714

■支出の部

(単位：円)

費目	予算①	決算②	①-②
会報編集発行	4,000,000	4,024,335	△24,335
入学・卒業記念品費	1,100,000	914,130	185,870
総会経費	1,000,000	921,940	78,060
名簿管理費	210,000	210,000	0
HP費	50,400	78,750	△28,350
部会・支部活動補助費	900,000	768,000	132,000
工学部賛助金	600,000	600,000	0
校友会費	150,000	150,000	0
学生援助費	1,000,000	1,000,000	0
非常勤講師援助費	500,000	440,000	60,000
会議費	120,000	94,632	25,368
渉外費	150,000	148,109	1,891
学内懇親会費	170,000	0	170,000
慶弔費	50,000	8,337	41,663
郵送通信費	350,000	376,690	△26,690
交通費	70,000	72,100	△2,100
運営費	100,000	0	100,000
事務員費	1,200,000	1,183,500	16,500
消耗品費	80,000	73,056	6,944
データ管理費	60,000	55,100	4,900
事務室備品費	0	0	0
雑費	40,000	39,814	186
特別会計繰入金	0	0	0
予備費	329,105	0	329,105
繰越金	0	1,170,726	△1,170,726
合計	12,229,505	12,329,219	△99,714

寄付者一覧

(注) 特は特別会員(現旧職員、ただし正会員は除く)、()内は所属部会
平成24年度(平成25年4月1日～平成26年3月31日)

■ 29口 ■	雑賀登志夫 (VI)	橋本 克巳 (III)	宇賀 洋子 (I)	菊島 俊吉 (VI)
岡田歩久登 (電機)	後藤 慎一 (VII)	林 忠雄 (III)	森 美恵 (I)	田沼 進 (VII)
	菅沼 昭平 (X)	長谷川繁治 (III)	北山 睦人 (I)	平山 巖 (VII)
■ 20口 ■	■ 7口 ■	田口 芳美 (III)	鈴木 貞寛 (II)	山田 旬 (VII)
山田 雅敏 (II)	桜井 吾郎 (III)	川田 勝巳 (III)	中野清一郎 (II)	芝木 儀夫 (VII)
		谷本 浩務 (III)	岩堀 道男 (II)	小野 正和 (VII)
■ 19口 ■	■ 6口 ■	牧野 圭助 (III)	小川三之助 (II)	加藤 俊造 (VII)
塩田 孝夫 (V)	椎名 國雄 (II)	五十嵐 実 (III)	山田 憲司 (II)	富永 昌治 (VIII)
	田中 明夫 (II)	岩井 隆夫 (III)	石橋 文男 (II)	秋元 文江 (X)
■ 11口 ■	田中 敏光 (IV)	和田 勝 (III)	伊藤 文男 (II)	山本さゆり (X)
三野健一郎 (III)	田中 敏光 (IV)	倉林 克行 (III)	山辺 佳世 (II)	森谷 紘 (共生)
	成毛喜一郎 (IV)	小久保重暢 (III)	田邊 宏志 (II)	土屋 和芳 (物工)
■ 10口 ■	山口 進介 (V)	大上 登 (III)	長澤 寿雄 (II)	細野 亮平 (電機)
鈴木 玲子 (I)	春田 修 (会友)	村田 実 (III)	榎本 良治 (III)	三好 絢子 (デ)
今井 克己 (I)	■ 5口 ■	安藤 裕之 (III)	石田 昌彦 (III)	室木 巧 (職員)
久田 敏夫 (II)	戸祭 正和 (I)	西村 亮 (III)	塩原 巖 (III)	小門 宏 (職員)
内藤 亮一 (II)	晝間 英二 (II)	清水 政志 (III)	金山 進 (III)	上松 敬禧 (職員)
平林 義正 (II)	菅野 良司 (II)	壺岐 良輔 (III)	小林 英夫 (III)	
小泉 勝也 (II)	重綱 博美 (II)	近岡 宏 (IV)	森本 敏夫 (III)	■ 2口 ■
山下 清久 (II)	田久保八郎 (II)	飯塚 矩規 (IV)	斎藤 晴朗 (III)	佐藤 中信 (I)
牧野 昭一 (II)	飯田 益三 (III)	蔭山 之雄 (IV)	高山 臣旦 (III)	澤口 正武 (I)
白石 輝光 (II)	神戸 信男 (III)	三村 行夫 (IV)	戸原 葱 (III)	関 壮一 (I)
田宮 由道 (III)	笹川 俊勝 (III)	浦田 雄治 (IV)	梶川 清 (III)	藤田 勉 (I)
大角 忠 (III)	藤代 裕 (III)	清水洋太郎 (IV)	千葉 春樹 (III)	西田 義隆 (I)
坂戸 和朗 (III)	梅原 康広 (III)	兼八 薫 (IV)	江原 和幸 (III)	田鎖 和哉 (I)
松谷 正明 (III)	寺内 英勝 (III)	中野 和則 (IV)	新垣 強二 (III)	谷口 方紀 (I)
山下 和郎 (IV)	越川 純男 (IV)	後藤 卓也 (V)	宇田川昭一 (III)	和田 精二 (I)
柏村 博之 (IV)	上羽 謙一 (IV)	小川 忠良 (V)	坂本 和也 (III)	千葉 健吉 (I)
伊藤 一郎 (V)	角田 幸紀 (IV)	芳野 禎文 (V)	柳澤 章 (III)	高橋 正 (I)
吉田 俊夫 (V)	二瓶 武男 (IV)	谷山 暁彦 (V)	阿波野康彦 (III)	吉田 実 (I)
亀井 和夫 (V)	阿久津文彦 (V)	森 元 (V)	佐藤 龍夫 (IV)	北川 裕司 (I)
松田 昭男 (V)	栗田 忠彦 (V)	関口 洋一 (V)	大川 澄雄 (IV)	平川 淳二 (I)
福本 敏明 (V)	馬養 友之 (V)	田中 昌幸 (V)	櫛淵 光彦 (IV)	岡田 優 (I)
田中 秀典 (V)	梶山 至 (V)	酒井 功 (V)	深澤 敦司 (IV)	廣川美津雄 (I)
白バラ会 (V)	福山賛次郎 (V)	加藤 祐一 (V)	戸石 三春 (IV)	秋岡 敏郎 (I)
梶田 興治 (VI)	鈴木 健一 (V)	大宮 秀一 (V)	飯塚 清 (IV)	本郷 伸彦 (I)
小川 圭一 (VII)	山本 芳正 (VI)	大谷 博之 (V)	大滝 正道 (IV)	安達 知明 (I)
志村 祥隆 (画像)	足立 純一 (VI)	河辻 輝之 (V)	篠崎 國雄 (IV)	寺田 重順 (I)
武田 圭二 (電機)	紅林 良之 (情報)	入山 隆 (VI)	比田井 裕 (IV)	田辺 章 (II)
	宇田川 泰 (情報)	竹村 一利 (VI)	筋 伸一 (IV)	坂野 一郎 (II)
	馬場 直志 (職員)	堀井 明彦 (VI)	齋藤久美子 (IV)	福本 卓治 (II)
■ 9口 ■	■ 4口 ■	鈴木 英夫 (VI)	岡本 勇三 (IV)	鈴木 康之 (II)
古見澤浩一 (I)	鹿野 喜保 (I)	黒河 忠市 (VII)	石崎 長俊 (IV)	西沢 洋 (II)
中村 穰 (I)	浜本 克哉 (I)	岩田 克彦 (VII)	永井 良一 (IV)	西山 正春 (II)
中澤 文隆 (I)	中村 文政 (I)	正田 章 (VII)	鈴木 昭夫 (V)	安生 満 (II)
深津 秀夫 (II)	赤羽 純 (I)	山内 亮一 (VII)	反保 一雄 (V)	秦 孝一 (II)
吉田 司 (II)	大森 茂生 (II)	郭 國泰 (VII)	稲木 秀次 (V)	小幡 和夫 (II)
友水 宏之 (II)	小菅 雅夫 (II)	氏家 康 (IX)	堀田 祐司 (V)	山根 昭 (II)
笠原 直哉 (II)	富田 純 (II)	清水いそ江 (X)	五十嵐洋一 (V)	安藤 伸治 (II)
三浦 邦夫 (III)	岡田 岩雄 (II)	高橋 康成 (院共)	楠瀬 暢彦 (V)	井上 謙吉 (II)
松山 哲也 (III)	廣川 義則 (II)	村井 希名 (院人)	池野 義行 (V)	野澤 守 (II)
湊 久直 (IV)	藤原 博昭 (II)	山田 彩歌 (情報)	高坂 信夫 (V)	岸田 敬三 (II)
茂出木敏雄 (IV)	村井 敬 (II)	鈴木 康之 (電機)	清水 博之 (V)	後藤 和司 (II)
石田 公孝 (IV)	若松 永 (II)	鈴木 洋行 (デ)	鈴木 淳 (V)	内藤 洪一 (II)
小久保 真 (IV)	宮下 智亘 (II)	東江 麻祐 (デ)	松尾 廣一 (V)	渡辺 俊男 (II)
中富 仁 (IV)	森 勝一 (II)		楠本 幸二 (VI)	大林 和彦 (II)
南木 昂 (V)		■ 3口 ■	渡辺 惇 (VI)	正法地紀之 (II)
山田 郁雄 (V)		野中 宏親 (I)	平賀 祐二 (VI)	鈴木 忠道 (II)
山崎信一郎 (V)				

中島 將好 (Ⅱ)	小川 秀雄 (Ⅲ)	北沢 幸一 (Ⅳ)	土屋 元彦 (Ⅵ)	■ 1口 ■
神山 正樹 (Ⅱ)	中村 雅勇 (Ⅲ)	仁田 昇 (Ⅳ)	高橋 恭介 (Ⅵ)	南部 章 (Ⅰ)
三田村隆司 (Ⅱ)	田頭 扶 (Ⅲ)	今田 伸司 (Ⅳ)	寺島 孝 (Ⅵ)	大堀 治宣 (Ⅰ)
坂口 守夫 (Ⅱ)	橋本 茂男 (Ⅲ)	佐藤 光一 (Ⅳ)	日比野繁雄 (Ⅵ)	川井 孝二 (Ⅰ)
佐藤 昌伸 (Ⅱ)	下村 孝 (Ⅲ)	杉本 和英 (Ⅳ)	地引 勝 (Ⅵ)	香西 一雄 (Ⅰ)
田口 裕一 (Ⅱ)	大沢 碩之 (Ⅲ)	大久保盛也 (Ⅳ)	村越 位光 (Ⅵ)	中嶋 昭彦 (Ⅰ)
金沢 健蔵 (Ⅱ)	桑名 一隆 (Ⅲ)	渡辺 優 (Ⅳ)	斉藤 光範 (Ⅵ)	徳光 宏一 (Ⅰ)
川口 登 (Ⅱ)	渡邊 一由 (Ⅲ)	村上 武志 (Ⅳ)	内田 忠伸 (Ⅵ)	八鳥 治久 (Ⅰ)
後藤 誠 (Ⅱ)	田辺 照男 (Ⅲ)	宮原 一敏 (Ⅳ)	小出 哲司 (Ⅵ)	寺尾 育子 (Ⅰ)
吉澤 輝三 (Ⅱ)	森 孝之 (Ⅲ)	田島 好和 (Ⅳ)	福田 信 (Ⅵ)	水野 晃一 (Ⅰ)
河津 亘 (Ⅱ)	山口 正明 (Ⅲ)	古賀 高雅 (Ⅳ)	平林 俊樹 (Ⅵ)	山田 卓生 (Ⅰ)
黒田 満男 (Ⅱ)	蠅庭 正信 (Ⅲ)	加藤 洋一 (Ⅳ)	浅井 禎和 (Ⅵ)	古森 亮二 (Ⅰ)
三好 尚武 (Ⅱ)	中里 充夫 (Ⅲ)	丹野 雅行 (Ⅳ)	宮田 弘幸 (Ⅵ)	古川 政明 (Ⅰ)
大桃 利正 (Ⅱ)	中村 良太 (Ⅲ)	草野 祐一 (Ⅳ)	大森 雅久 (Ⅵ)	西光 昭夫 (Ⅰ)
清水 四郎 (Ⅱ)	林 静男 (Ⅲ)	斉藤 墳 (Ⅴ)	山高 修一 (Ⅵ)	黒河 昭一 (Ⅰ)
吉田 博公 (Ⅱ)	春日 孝介 (Ⅲ)	大和田英昭 (Ⅴ)	安斉 孝之 (Ⅵ)	倉田 義己 (Ⅰ)
上坂 省二 (Ⅱ)	英 聖一 (Ⅲ)	白井 栄 (Ⅴ)	中村 勝利 (Ⅵ)	五十嵐賢次 (Ⅰ)
森本 健二 (Ⅱ)	小川 秀司 (Ⅲ)	橘 宗昭 (Ⅴ)	鈴木 章方 (Ⅵ)	足立 和彦 (Ⅰ)
善養寺圭吾 (Ⅱ)	桑原 健郎 (Ⅲ)	伊倉賢一郎 (Ⅴ)	今城 力夫 (Ⅵ)	遠藤 晋 (Ⅰ)
小島 健司 (Ⅱ)	園部 一之 (Ⅲ)	杉山 武 (Ⅴ)	岸本 靖彦 (Ⅵ・Ⅶ)	鈴木 進 (Ⅰ)
高橋 八朗 (Ⅱ)	山崎 主雄 (Ⅲ)	栗原 信介 (Ⅴ)	渋谷 岳人 (Ⅵ・Ⅶ)	赤瀬 達三 (Ⅰ)
大家 教正 (Ⅱ)	中村 一馬 (Ⅲ)	村雄 弘尚 (Ⅴ)	沼本 格 (Ⅵ・Ⅶ)	児山 啓一 (Ⅰ)
久保寺 淳 (Ⅱ)	小林 貞彦 (Ⅲ)	高橋 威 (Ⅴ)	江川 好古 (Ⅶ)	前川 健 (Ⅰ)
高久 真一 (Ⅱ)	三代川滋則 (Ⅲ)	片岡 正 (Ⅴ)	野村 蔚 (Ⅶ)	関野 元 (Ⅰ)
加藤 宏一 (Ⅱ)	照井 隆 (Ⅲ)	上條 堅次 (Ⅴ)	北村 維敏 (Ⅶ)	桜井 秀紀 (Ⅰ)
佐藤 光徳 (Ⅱ)	出口 伸幸 (Ⅲ)	奥山 敏樹 (Ⅴ)	沼野 博文 (Ⅶ)	祝井 正人 (Ⅰ)
山崎 真詠 (Ⅱ)	山下 嘉久 (Ⅲ)	田辺 敏夫 (Ⅴ)	小出 敏明 (Ⅶ)	小笠原伸一 (Ⅰ)
濱上 興一 (Ⅱ)	菊池 健二 (Ⅲ)	物井 惠一 (Ⅴ)	中村 正樹 (Ⅶ)	小竹 修 (Ⅰ)
安田征一郎 (Ⅱ)	山口 優 (Ⅲ)	川田 晃嗣 (Ⅴ)	中田 規夫 (Ⅶ)	伊藤 文隆 (Ⅰ)
横井清一郎 (Ⅱ)	廣瀬 喜明 (Ⅲ)	倉田 研一 (Ⅴ)	矢島 功二 (Ⅶ)	伴流多佳子 (Ⅰ)
小幡 敏夫 (Ⅱ)	中村 寿夫 (Ⅲ)	浅見 栄二 (Ⅴ)	水戸 良太 (Ⅶ)	桂 雅彦 (Ⅰ)
杉 富士雄 (Ⅱ)	平原 一豊 (Ⅲ)	石丸 貞冬 (Ⅴ)	鎌形 寿男 (Ⅶ)	本城 信善 (Ⅰ)
塚田 英武 (Ⅱ)	鈴木 誠 (Ⅲ)	小林 敬古 (Ⅴ)	伊東 郁男 (Ⅶ)	小城 浩之 (Ⅰ)
中嶋 成夫 (Ⅱ)	押谷 豊 (Ⅲ)	長谷川康行 (Ⅴ)	内田 敏夫 (Ⅶ)	中澤 守 (Ⅰ)
杉山 勝征 (Ⅱ)	内田 彰 (Ⅲ)	府中 裕一 (Ⅴ)	大塚 武史 (Ⅶ)	松吉 昌代 (Ⅰ)
船井 洋一 (Ⅱ)	杉田 明彦 (Ⅲ)	麻生 一夫 (Ⅴ)	坂本 敬亮 (Ⅶ)	佐野 禎彦 (Ⅰ)
渡辺 光雄 (Ⅱ)	塩原 正美 (Ⅲ)	斎藤 晴夫 (Ⅴ)	磯貝 三郎 (Ⅶ)	中村麻日奈 (Ⅰ)
渡邊 孝 (Ⅱ)	早川順次郎 (Ⅳ)	清水 俊雄 (Ⅴ)	大山 稔 (Ⅶ)	岡本 浩志 (Ⅰ)
清水 茂 (Ⅱ)	坂本 恒徳 (Ⅳ)	西村 淳 (Ⅴ)	大塚 武 (Ⅷ)	小内 朝子 (Ⅰ)
幡 好明 (Ⅱ)	長田 正造 (Ⅳ)	杉森 由章 (Ⅴ)	安藤 賢孝 (Ⅹ)	増山 正明 (Ⅰ)
彦坂 誠次 (Ⅱ)	戸田 暉良 (Ⅳ)	中谷 宏 (Ⅴ)	原 安雄 (Ⅹ)	田中 稔 (Ⅰ)
森 敏章 (Ⅱ)	椿 桂三 (Ⅳ)	山本 晋介 (Ⅴ)	岡野 直美 (Ⅹ)	石井 有光 (Ⅰ)
寄水 義雄 (Ⅲ)	青山 宏一 (Ⅳ)	川嶋 静雄 (Ⅴ)	吉田 侑基 (Ⅺ)	最上 昌哉 (Ⅰ)
永野 俊男 (Ⅲ)	赤井 康亮 (Ⅳ)	北山 五郎 (Ⅴ)	草間 拓真 (院知)	木村 護 (Ⅰ)
鹿島 完 (Ⅲ)	天野 譚溥 (Ⅳ)	三田菜穂子 (Ⅴ)	中川 崇史 (院人)	川添 集朗 (Ⅰ)
三好 次郎 (Ⅲ)	高山 建三 (Ⅳ)	増田 啓司 (Ⅴ)	平澤 雄輔 (情報)	境野 広志 (Ⅰ)
川村 博 (Ⅲ)	田村 和男 (Ⅳ)	梁田 賢悦 (Ⅴ)	田中 康弘 (情報)	垂水 茂喜 (Ⅰ)
中村 松夫 (Ⅲ)	尾崎 元昭 (Ⅳ)	佐々木健一 (Ⅴ)	山口芙未子 (電機)	富松 陸郎 (Ⅰ)
江口 正知 (Ⅲ)	石原 亮 (Ⅳ)	中村佐紀子 (Ⅴ)	甲山 貴章 (電機)	武藤 栄希 (Ⅰ)
大堀 昭午 (Ⅲ)	尾崎 裕治 (Ⅳ)	稲見 一郎 (Ⅴ)	片岡淳之介 (電機)	渡辺 昇 (Ⅰ)
下山 高 (Ⅲ)	金沢 一良 (Ⅳ)	遠藤 和郎 (Ⅴ)	橋本 明将 (電機)	佐野 道雄 (Ⅰ)
宮嶋 實 (Ⅲ)	前田 稔展 (Ⅳ)	齋田 正之 (Ⅴ)	小林 航 (電機)	安井 敏 (Ⅰ)
大井淳一郎 (Ⅲ)	酒井 洋 (Ⅳ)	渡辺 淳一 (Ⅴ)	森山 貴司 (電機)	鹿久保きちよ (Ⅰ)
渡部 富治 (Ⅲ)	柴 忠敏 (Ⅳ)	鶴田 利彦 (Ⅴ)	戸森 哲哉 (電機)	星 勇 (Ⅰ)
石川 博彦 (Ⅲ)	牛尾 洋二 (Ⅳ)	吉田 博 (Ⅴ)	石川 堯大 (電機)	藤江 彰 (Ⅰ)
滝沢 暁 (Ⅲ)	後藤 良男 (Ⅳ)	高橋 雅樹 (Ⅴ)	高橋 智己 (電機)	伊藤 純子 (Ⅰ)
河本 研一 (Ⅲ)	末石 元晴 (Ⅳ)	蕪木 健二 (Ⅴ)	我妻 武 (電機)	戸谷 一雄 (Ⅰ)
河田 進 (Ⅲ)	高橋 盛広 (Ⅳ)	高野 茂 (Ⅴ)	大澤 佑介 (十)	碓 瑞恵 (Ⅰ)
湯本 良 (Ⅲ)	塚本 允孜 (Ⅳ)	蛭海 進 (Ⅵ)	服部 岑生 (職員)	小嶋 良一 (Ⅰ)
伊集院 忠 (Ⅲ)	楨 一光 (Ⅳ)	梅原 幸彦 (Ⅵ)	久保 宏子 (職員)	栗山 孟 (Ⅱ)
林 侑孝 (Ⅲ)	松沼 悦男 (Ⅳ)	久保 走一 (Ⅵ)	辻内 順平 (職員)	高藪 昭 (Ⅱ)
小川 恵也 (Ⅲ)	榎並 誠 (Ⅳ)	吉村 節子 (Ⅵ)		原田 善之 (Ⅱ)
小手 一洋 (Ⅲ)	和久津啓治 (Ⅳ)	荒川 光男 (Ⅵ)		生長 秀介 (Ⅱ)

山際 延夫	(II)	吉田 英雄	(II)	瀨田 浩司	(III)	日下 俊輔	(III)	花香郁太郎	(IV)
金子誠之助	(II)	鈴木 健久	(II)	松本 嘉己	(III)	津下 豊彦	(III)	玉利 俊一	(IV)
三瓶 和夫	(II)	大門三千江	(II)	渡辺 紀之	(III)	有我 祐一	(III)	藤倉 信之	(IV)
和田 文吾	(II)	富島 誠司	(II)	藤田 尚宣	(III)	矢田 雄二	(III)	石踊 誠	(IV)
森 一成	(II)	室 英治	(II)	堀尾 和正	(III)	金井 慎一	(III)	佐々木 司	(IV)
赤塚 巖	(II)	橋本 康夫	(II)	米田 喬	(III)	金指 圭洋	(III)	大塚 正善	(IV)
尾上 孝一	(II)	藤巻 清高	(II)	島田 雅吉	(III)	佐々木靖行	(III)	福田 康夫	(IV)
堂 健二	(II)	笹谷 輝雄	(II)	谷口 光政	(III)	飯塚 一雄	(III)	藤井 盛	(IV)
浅野 盛治	(II)	野竹 正義	(II)	小口 博義	(III)	末永 時和	(III)	金澤 伸春	(IV)
大和田包明	(II)	立道 郁生	(II)	有戸 立也	(III)	近藤 信雄	(III)	武内 寿	(IV)
豊住 恭臣	(II)	柳 雅夫	(II)	久力 正一	(III)	佐藤 雄三	(III)	吉田 生雄	(IV)
大山 弘	(II)	桧垣 歩	(II)	小林 亮一	(III)	山田 陽二	(III)	岩田 春久	(IV)
藤森 正忠	(II)	太田 達見	(II)	鈴木 則道	(III)	宮澤 芳幸	(III)	神田 憲治	(IV)
柴原 達明	(II)	宮本 圭一	(II)	田川 正洋	(III)	永田 朗	(III)	池田 健二	(IV)
富永 慶宇	(II)	原 健二	(II)	中山 勝博	(III)	井上 浩一	(III)	関口 芳弘	(IV)
矢作 茂	(II)	引地 健彦	(II)	本忠 瑞穂	(III)	宮元 嘉之	(III)	石渡 音也	(IV)
池田 光男	(II)	塚本 正臣	(II)	深山 健也	(III)	鶴沢新太郎	(III)	土橋 昌郎	(IV)
田中 修一	(II)	瀬川二三男	(II)	池田克登志	(III)	石渡 直尚	(III)	茂木 稔	(IV)
石垣 修亨	(II)	吉崎 春雄	(II)	関 知耻忠	(III)	塚越 孝一	(III)	嶋原 勝久	(IV)
勢木宇太郎	(II)	岡田 哲	(II)	田中 章順	(III)	加藤 次雄	(III)	長坂 高男	(IV)
高野 正道	(II)	中村 淳二	(II)	福田聡三郎	(III)	山根 和敏	(III)	佐々木一人	(IV)
畑野 肇	(II)	藤本 匡	(II)	山崎 英昭	(III)	松崎 幹康	(III)	橋本 聡	(IV)
林 靖男	(II)	霞 晴義	(III)	遠藤 誠久	(III)	渡辺 信彦	(III)	二宮 功	(IV)
吉田 龍生	(II)	加藤 泰三	(III)	上田 俊弘	(III)	福田 昭	(III)	齊藤 鉄弥	(IV)
久米 四郎	(II)	北 節雄	(III)	丹野 晃弘	(III)	高山 雅道	(III)	谷津 尋之	(IV)
北 清一郎	(II)	高尾 新生	(III)	市川 浩伸	(III)	綾部 正明	(III)	菅井 隆行	(IV)
樽林 和夫	(II)	鷹取 脩	(III)	岩佐 弘志	(III)	高木 滋	(IV)	古川 秀樹	(IV)
西田 和夫	(II)	岡部 弘	(III)	岩本 光則	(III)	田村 重雄	(IV)	田内洋一郎	(IV)
小泉 廣明	(II)	安岡 昭男	(III)	広瀬 次郎	(III)	小原 信一	(IV)	鈴木 高德	(IV)
福田 俊夫	(II)	谷口 武知	(III)	三宅 伸治	(III)	山形 和夫	(IV)	坂原 義夫	(IV)
加藤由紀子	(II)	仲田 潔	(III)	小林 満	(III)	西田 誠夫	(IV)	遠藤 功	(IV)
奥沢 毅	(II)	野口 功二	(III)	田村 高志	(III)	堀 健次郎	(IV)	大塚 秀樹	(IV)
竹中 一雄	(II)	細井 信生	(III)	徳澤 拓郎	(III)	中台 照幸	(IV)	杉下 雄一	(IV)
村中 恭一	(II)	中村 均	(III)	根本 一郎	(III)	本橋 昭二	(IV)	清水 裕	(IV)
加藤 清彦	(II)	山下 昇	(III)	山崎 秀夫	(III)	小林 一博	(IV)	山本 吾郎	(IV)
東 正一	(II)	伊藤 威信	(III)	遠藤 修	(III)	田中 昌	(IV)	薄葉 光弘	(IV)
富田 直人	(II)	高橋 茂	(III)	石橋 康正	(III)	中司 浩生	(IV)	鈴木 孝志	(IV)
藤巻 慎一	(II)	戸澤 孝壽	(III)	作山 英雄	(III)	新垣 晃	(IV)	高橋 勉	(IV)
増田 茂典	(II)	山口 智之	(III)	園田 治朗	(III)	西塚 晶彦	(IV)	木村 千秋	(IV)
真柴 正徳	(II)	吉井 純	(III)	山田 恵一	(III)	松崎 茂夫	(IV)	玉虫 彰弘	(IV)
内田 和弘	(II)	佐々木三郎	(III)	岡本 保孝	(III)	草深 博好	(IV)	相沢 喬	(IV)
作間 健	(II)	三谷 喜朗	(III)	根岸 廣介	(III)	高田 洋	(IV)	小原 健司	(IV)
山本 晃	(II)	野和田信一	(III)	加藤 裕之	(III)	山上 晃	(IV)	上野 文男	(IV)
高橋 浩治	(II)	日野 俊昭	(III)	緒方 一裕	(III)	茂木 節雄	(IV)	伊東 和美	(IV)
木谷 勤治	(II)	松井 雅男	(III)	菊地 英俊	(III)	田口 潤	(IV)	武田 広也	(IV)
越智 英明	(II)	大津 亘	(III)	檜 康治	(III)	倉上 一郎	(IV)	高須 伸夫	(IV)
木下 昭彦	(II)	金子 和弘	(III)	鈴木 幹人	(III)	酒井 紀典	(IV)	檜垣 泰彦	(IV)
高橋 浩	(II)	相馬 一朗	(III)	松本 栄一	(III)	田村 均	(IV)	片岡 良彦	(IV)
太田 明良	(II)	中野 一郎	(III)	小野原 勉	(III)	吉岡 武志	(IV)	尾上 浩三	(IV)
石月 謙一	(II)	岡田 信近	(III)	大町 昭司	(III)	塩田 美彦	(IV)	三浦真由美	(IV)
小林 裕之	(II)	音山 芳徳	(III)	安江 克美	(III)	福部 國弘	(IV)	斎藤 隆之	(IV)
江川 太吉	(II)	小出 富夫	(III)	山本 晃司	(III)	小西 寛	(IV)	住本 勉	(IV)
杉山 武彦	(II)	平出 明	(III)	日向 武夫	(III)	新郷 善興	(IV)	原田 晃一	(IV)
丸山 英樹	(II)	福島 成次	(III)	田谷 耕一	(III)	丹羽 一寿	(IV)	今野 修	(IV)
瀬戸 守	(II)	小和田 茂	(III)	塚越 一基	(III)	須加 文雄	(IV)	市原 勲	(IV)
田下 新一	(II)	行木 茂	(III)	横井 学	(III)	三國 宏一	(IV)	石渡 隆男	(IV)
滝澤 栄子	(II)	白鳥 邦治	(III)	森岡 光	(III)	三宅 正高	(IV)	久保田 彰	(IV)
布施 肇	(II)	今沢 邦仁	(III)	佐々木 理	(III)	米須 清英	(IV)	林 孝明	(IV)
松本 和浩	(II)	山口 雄史	(III)	神戸 聡	(III)	新井 道郎	(IV)	笠川 英樹	(IV)
柳澤 正信	(II)	伊藤 健一	(III)	吉野 耕司	(III)	小坂橋 徹	(IV)	金子 啓三	(IV)
石原 弘仁	(II)	柴崎 喜重	(III)	大森 一樹	(III)	田辺 喜彦	(IV)	小枝 金治	(IV)
田中 絹子	(II)	融 成三	(III)	西尾 弘毅	(III)	田村 一男	(IV)	山崎 和次	(IV)
田中 健太	(II)	徳屋 友彦	(III)	麻生 正	(III)	見月 真人	(IV)	伊藤 尚徳	(V)

宇梶 次男 (V)	山本 剛 (V)	久保 敬司 (VI)	岡松 暁夫 (VII)	篠塚 悠 (院共)
塩原 秀夫 (V)	大久保和彦 (V)	徳江 雅宏 (VI)	仙波 季長 (VII)	吉井 孝子 (院建)
下山 孝敏 (V)	高月 健一 (V)	市來 逸彦 (VI)	鈴木 敦 (VII)	太田 健司 (院デ)
三枝 起夫 (V)	吉岡 真一 (V)	久野 治 (VI)	長谷川隆史 (VII)	石橋 彰吾 (院デ)
栗林 敏郎 (V)	藤本 克宏 (V)	荻野 洋二 (VI)	佐藤 昌弘 (VII)	宮川 翼 (院知)
小柳 登 (V)	美濃口正典 (V)	菅原 大作 (VI)	丸山美恵子 (VII)	青木 義也 (共生)
曾我 恒彦 (V)	遠西 正数 (V)	高橋 英昭 (VI)	岩田 耕平 (VII)	茂木 淳 (共生)
友森 隆洋 (V)	岡本 芳浩 (V)	岩井恵美子 (VI)	喜多村 淳 (VII)	茨城 萌 (共生)
村田 正行 (V)	高橋龍太郎 (V)	岩井 正道 (VI)	井村 敦子 (VII)	平良 亮 (共生)
石塚 洋 (V)	熊田 浩明 (V)	大橋 康男 (VI)	石田 知仁 (VII)	田中茂登子 (物工)
後藤 晴司 (V)	澤野 守 (V)	中村 甚継 (VI)	玉虫 幸雄 (VII)	松田 高博 (物工)
田中 満 (V)	善場 研也 (V)	山本 衛 (VI・VII)	榎本 哲巳 (VII)	大野 裕介 (物工)
松尾 弘任 (V)	海老原 昇 (V)	古賀智香子 (VI・VII)	斎藤 進 (VII)	濱野 一平 (物工)
阿部 徹彦 (V)	木下明日香 (V)	宮脇 修三 (VI・VII)	田林 勲 (VII)	有川 徳子 (物工)
石川 治男 (V)	高澤 祐 (V)	金木 真人 (VI・VII)	大湊 忠則 (VII)	安野 雄介 (物工)
鈴木 直幸 (V)	島 好太郎 (V)	阿部 正子 (VI・VII)	李 岩 (VII)	伊藤 悦子 (物工)
三平 忠宏 (V)	大塚 一徳 (V)	吉川 和寿 (VI・VII)	島 基之 (VII)	西山 雄気 (情報)
松丸 博昭 (V)	織間 勇 (VI)	青木 功 (VI・VII)	磯 芳也 (VII)	谷口 紘平 (情報)
三友 護 (V)	原 誠 (VI)	菅原 勝彦 (VI・VII)	佐藤 要助 (VII)	吉田 淳 (情報)
結城 命夫 (V)	小松 康世 (VI)	中瀬 貴大 (VI・VII)	田中 尚安 (VII)	横川 直紀 (情報)
成川 攻 (V)	山本 之彦 (VI)	酒井 伸和 (VI・VII)	百瀬 巖 (VII)	高橋真奈美 (情報)
樋口 茂延 (V)	武田市太郎 (VI)	木内 豊彦 (VII)	三浦 叙之 (VII)	向井 光紀 (情報)
山田 信彦 (V)	小宮 孝雄 (VI)	蟻田 順三 (VII)	森 和郎 (VII)	古谷 佳大 (情報)
前田 満 (V)	設楽 清 (VI)	片山 賢二 (VII)	山田 秀夫 (VII)	田中 英憲 (情報)
細井 映司 (V)	山田 義彦 (VI)	桧垣 順次 (VII)	谷野 信吾 (VIII)	藤井 良平 (画像)
守 敏男 (V)	新井 靖久 (VI)	飯田 均 (VII)	池谷 友仁 (VIII)	小林 修平 (電機)
高橋 建司 (V)	河野 功 (VI)	金子 実 (VII)	倉持 匠弘 (VIII)	松原 英司 (電機)
徳竹 孝幸 (V)	益田 聖 (VI)	越野 政雄 (VII)	佐々木 聡 (VIII)	兒玉 崇 (電機)
中山 和良 (V)	三村 一俊 (VI)	佐久間 悌 (VII)	佐々木 宏 (VIII)	丸門 直登 (電機)
有田 潔 (V)	中島 淳哉 (VI)	竹原 悟 (VII)	中島雄一郎 (IX)	伊藤 由孝 (電機)
野口 英夫 (V)	原 忠義 (VI)	木下 堯博 (VII)	西岡 潤二 (IX)	平野 正泰 (電機)
岩崎 安雄 (V)	手塚 辰保 (VI)	鳥海 昇 (VII)	近藤 功一 (IX)	井上 麗子 (電機)
尾崎 和人 (V)	広井 敏男 (VI)	原 淨隆 (VII)	福永 博哉 (IX)	松村 浩志 (電機)
腰山 伊彦 (V)	池松 勝紀 (VI)	蛭原富司也 (VII)	野本 耕一 (X)	氏原 芳朗 (電機)
新田 勝久 (V)	樋口 武 (VI)	清時 竹彦 (VII)	白石 雅士 (X)	小川 尚記 (電機)
横尾 朗 (V)	諸岡 征之 (VI)	平本 泰章 (VII)	江田 隆正 (X)	佐寫 浩之 (電機)
長谷見明男 (V)	柏倉 良而 (VI)	森 貞介 (VII)	大木 登 (X)	遠藤 優 (電機)
佐久間隆司 (V)	佐野 和雄 (VI)	森島 毅 (VII)	神保 勲 (X)	細田 和馬 (電機)
長尾 輝哉 (V)	富山 昌史 (VI)	西 邦夫 (VII)	古月 美恵 (X)	三輪 善広 (電機)
小川 雅彦 (V)	斉藤 延夫 (VI)	内堀 隆裕 (VII)	相武 範昭 (X)	植原 亮太 (電機)
中野 睦子 (V)	松木 毅 (VI)	黒川 静 (VII)	酒井 光義 (X)	加藤 寛之 (デ)
田中 聖之 (V)	石田 浩男 (VI)	高橋登志雄 (VII)	北岡 勝江 (X)	観音 千尋 (デ)
佐藤 直人 (V)	白鳥真太郎 (VI)	田口 英明 (VII)	中川 聖子 (X)	原山 聡子 (デ)
大原 美絵 (V)	金子 茂 (VI)	橋本 堅治 (VII)	長谷川雄祐 (X)	富田真裕子 (デ)
穂谷野雅史 (V)	塚越 初雄 (VI)	安達 昭三 (VII)	吉井 昭宏 (X)	織田 万波 (デ)
堀 雅樹 (V)	寺沢 賢一 (VI)	平田 忠 (VII)	喜美候部継示 (X)	照井 丈大 (デ)
須賀 純一 (V)	渡辺 康博 (VI)	樋口 宗治 (VII)	福島信太郎 (X)	北野 雄貴 (デ)
多田 克利 (V)	森田 章嗣 (VI)	沖 尚武 (VII)	岩井 玲子 (X)	飯塚 拓郎 (デ)
北谷 純治 (V)	花畑 雅之 (VI)	柏原 克昭 (VII)	岡田 和之 (X)	栗山 太吾 (デ)
岩瀬 章代 (V)	小田 透 (VI)	野中 通敬 (VII)	塚越愛樹彦 (X)	徳田 周太 (デ)
瀬戸 潔 (V)	渡辺 幸保 (VI)	山田 敏雄 (VII)	弓田 博 (X)	音丸 謙 (職員)
三野 育宏 (V)	井上 充夫 (VI)	河野 幸司 (VII)	君島 康太 (X)	堀田 明裕 (職員)
榮田 博 (V)	西村 敬喜 (VI)	田口 慎一 (VII)	山口 英明 (X)	高田 潤一 (職員)
佐藤 栄司 (V)	米沢 彰 (VI)	中島 昭博 (VII)	平山 智則 (X)	
岩村 響 (V)	緒方 俊文 (VI)	佐々木 孝 (VII)	片野 正彦 (X)	
岩佐 真作 (V)	原 幸浩 (VI)	原口 米夫 (VII)	清澤 翔士 (メ)	
竹田 和俊 (V)	厚見 透 (VI)	森田 康義 (VII)	津崎 翔伍 (メ)	
安達 龍二 (V)	川堀 昌樹 (VI)	手塚 景二 (VII)	後藤 翔一 (メ)	
斉藤 敏夫 (V)	田村 知久 (VI)	山口 収一 (VII)	岩倉 大輔 (院人)	
竹中 史夫 (V)	尾崎 裕司 (VI)	坏 英一 (VII)	長廣 明優 (院人)	
浦和茂登男 (V)	高須 義雄 (VI)	下川原厚男 (VII)	鎌田 太郎 (院人)	
石塚 聡 (V)	春田 昌宏 (VI)	新宮領 慧 (VII)	車田 暁 (院人)	
菅原 理二 (V)	荒牧 哲 (VI)	渡辺 功典 (VII)	丸門 祥 (院人)	

工学研究科附属次世代モビリティパワーソース研究センター竣工記念式典を開催

平成26年7月4日、工学研究科附属次世代モビリティパワーソース研究センター竣工記念式典が開催されました。式典には、徳久剛史学長、北村彰英工学研究科長をはじめ、櫻田義孝文部科学副大臣、福島洋経済産業省大臣官房参事官、戸部知子千葉県商工労働部次長のほか、産業界や学界など学内外からおよそ200名が出席しました。

同センターは、平成25年4月、次世代モビリティパワーソースの研究開発および実用化の拠点として、産学官連携による世界に先駆けた高効率で低公害の自動車用パワートレインの研究開発および実証を行い、製品化を推進することを目的として経産省の補助金により建物と設備が整備されました。多くの大学と自動車産業界との連携により、オールジャパン体制で基礎研究から実証研究まで、幅広く共同して研究する母体となることが期待されています。

同センターでは、次世代モビリティパワーソース研究センター・センター長の森吉泰生教授（大学院工学

研究科）および窪山達也准教授（大学院工学研究科）を中心に、自動車・部品会社/千葉大学/関連分野の他大学等の研究チームとともに、高効率で低公害な次世代パワーソース開発のための基盤技術の実証・開発研究を実験と理論両面から総合的なアプローチが行えるコンソーシアム体制で実施します。さらに、コンソーシアムや民間企業との共同研究を通じて、高度な知識と技術力を備えた人材育成を目指し、オールジャパンで産学官連携活動による明確なアウトカムの実現を目指しています。

次世代モビリティパワーソース研究センターの建物は、西千葉キャンパス・フロンティア医工学センター東側にあります。センターについての詳細はホームページでもご覧になれます（<http://engine50.tm.chiba-u.jp/mobilityPSRC/index.html>）。お近くにお越しの際はぜひお立ち寄りいただければと思います。

（センター長 森吉 泰生 記）



看板上掲式（右側より森吉センター長、猿渡理事[総務担当]、徳久学長、中谷理事[企画担当]、北村工学研究科長）



視察風景（右側より窪山准教授、櫻田副大臣、徳久学長、猿渡理事[総務担当]、北村工学研究科長）

工学同窓会総会・懇親会への皆さまのご参加をお待ちしております

工学同窓会では、毎年5月に東京近郊のホテルにて総会・懇親会を開催しております。総会・懇親会には、同窓会会長・工学部長をはじめ、各界でご活躍される多くの関係者の皆さまにご出席いただいております。懇親会会場では毎年、お世話になっていた恩師や学生生活をともにした級友、先輩・後輩との再会を喜ぶ声があちこちで聞こえ、ご出席いただいた同窓生からは大変有意義だったとのコメントが多数寄せられております。

工学同窓会では、今後、同窓生の交流の機会を増やし、同窓会会員のネットワークを拡充することで、工学部のより一層の活動の充実を推進してまいります。同期の方々をお誘い合わせの上、ぜひ総会・懇親会にご参加くださいますようお願い申し上げます。皆さまのご参加を心よりお待ちしております。

（工学同窓会事務局 記）

工学同窓会による学生支援

工学同窓会では、学生の自主性や独創性を高め、学生が主体となって積極的に学内外で活動できる機会を提供するための後援活動を行っております。その一環として、学生主体の各種コンペティションやイベント参加に対する援助を平成19年度から行ってまいりました。当初、支援した学生団体数は2つでしたが、6年目となる平成25年度は、多数の支援申請をいただきまして、これまでで最多となる以下の8つのプロジェクト事業を支援しました。

- ・建築学科卒業設計展
- ・千葉大学フォーミュラプロジェクト
- ・東京デザイナーズウィーク
- ・都市環展
- ・パルスジェットエンジン研究会
- ・CRS (Chiba.Robot.Studio)
- ・CUAD (Chiba University,
the architecture department)
- ・iGEM Chiba 2013
(International Genetically
Engineered Machine Competition)

デザインや設計、開発まで多様でユニークなテーマを掲げ、多くのイベントにおいて高い評価や授賞を受けました。またNPOや県との活動を通じて、広く地域・

社会に貢献した団体もありました。

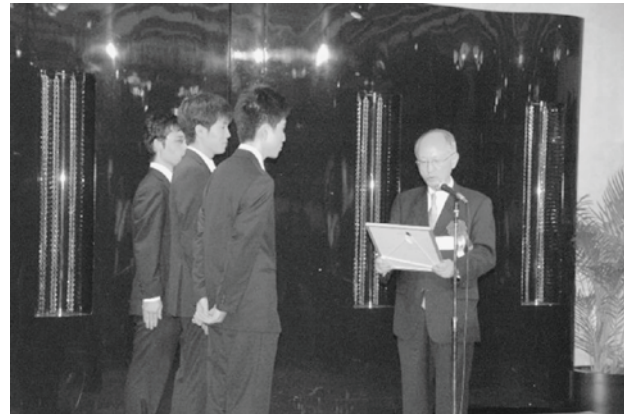
工学同窓会では平成25年度における上記8つの学生支援団体の中で、特に優れた活動を行った「iGEM Chiba 2013」、「千葉大学フォーミュラプロジェクト」および「CRS」の3つの学生団体に対して、学生活動奨励賞を授与しました。授賞式は、平成26年5月30日(金)に開催された工学同窓会総会・懇親会の際に行われ、工学同窓会・塩田会長より学生活動奨励賞の表彰および記念の楯が各団体に贈呈されました。授賞を受けた各団体は、これまでの成果を会員の皆さまの前で発表し、活発な活動内容はもちろんのこと、工夫を凝らしたプレゼンテーションも披露してくださいました。

授賞式は30分程度と非常に短い時間ではありましたが、大盛況のうちに終わることができました。授賞された学生の皆さま、お忙しい中、どうもありがとうございました。

工学同窓会では、今後も優れた活動に取り組んでいる学生団体に対して後援活動を行っていく予定でございます。次年度も更なる皆さまの独創性・発想力に富んだ取り組みとご活躍を期待しております。

最後になりましたが、本事業の実施にあたり、多くのご指導・ご支援をいただきました関係の皆さまに心から御礼を申し上げます。

(幹事長 幸本 重男 記)



学生活動奨励賞の表彰式の様子

総会・懇親会のご案内

浦安ブライトンホテルにて 開催されます。

平成27年度の総会・懇親会を下記の通り開催致します。皆様、お誘いあわせの上、是非ご参加下さいますよう、ご案内申し上げます。

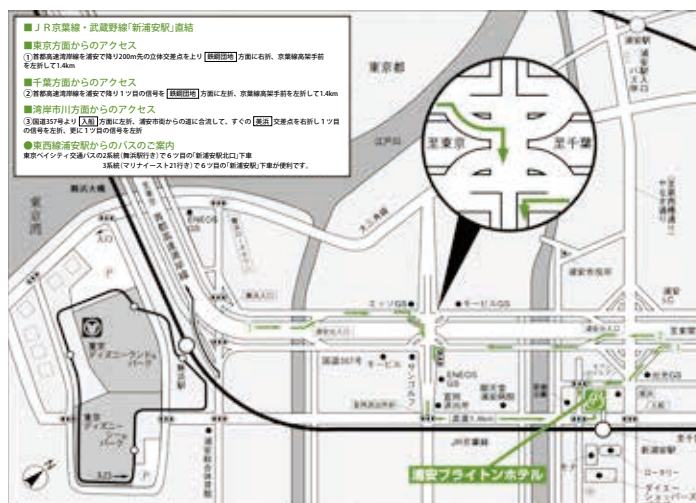
記

日時：平成27年5月29日(金)
受付 午後5:00より
総会 5:30～6:00
懇親会 6:00～8:00

会場：浦安ブライトンホテル
1階ファーストの間
千葉県浦安市美浜1の9
電話 047-355-7777

会費：3,000円(当日受付にて申し受けます)

- 出席のお申し込みは、同封のはがきで、5月7日(木)までに必着するようにお願い致します。



電車で:

JR京葉線・武蔵野線「新浦安駅」直結
JR「東京駅」より快速で約17分
JR京葉線「海浜幕張駅」より快速で約12分
JR武蔵野線・総武線「西船橋駅」より快速で約9分
地下鉄日比谷線「八丁堀駅」よりJR線乗り換え快速で約15分
地下鉄有楽町線「新木場駅」よりJR線乗り換え各駅停車で約9分

●当ホテルは、
JR「新浦安駅」から歩いて1分。
ペDESTリアンデッキで直結していますので、ステーションプロムナードからホテル・アトリウムまで、そのままお越しになれます。

会費納入とご寄付のお願い

●年会費納入のお願い

平成5年度の総会で会則が改正され、平成6年度より、特別会員(同校、同学部現旧教官、ただし正会員を除く)以外の正会員ならびに会友の皆様へ、年会費1,000円を納入していただくことになっております。諸般の事情をご理解下さり、会費をご納入下さいます様、何卒、お願い申し上げます。

年会費は 1,000円です。

●ご寄付のお願い

工学同窓会の運営が安定的に行えますよう、会費に併せまして、皆様からのご寄付をいただければ幸いです。ホームページの充実、工学部資料室設置への協力など、毎年の運営費以外の事業費に充てられればと思います。

●年会費およびご寄付のご送金は

両方とも、同封いたしました郵便振替用紙にてお願いいたします。

なお毎年この振込用紙が同封されますが、すでに本年度分の年会費を前納されている方は必要ありません。

事務局からのお願い——おたより募集と住所等変更連絡のお願い

●会員の皆様からのおたよりを募集しています。

同窓生の皆様のための会報とするため、編集委員会では、会員の皆様からのおたよりを随時募集しております。同期会の報告や、皆様の近況、お仕事ぶりなどのお便りを、是非、事務局までお寄せ下さい。誌面の許す限り、掲載させていただきたいと思っております。

●住所、勤務先、電話番号などが変わられた方はお知らせ下さい。

これらに変更がありました際には、お手数ですが、同封のはがき、ホームページ上またはFAXで、同窓会事務局までご一報下さい。

●当同窓会では、会員名簿の管理、発行は(株)サラトに委託しております。最近、(株)サラト以外の業者からも、名簿刊行の案内がありますが、これは当会とは一切関係ありませんので、ご注意下さい。

会報編集委員:

天野佳正(委員長)、原 寛道、島田侑子、小林謙一、小坏成一、宮川信一、檜垣泰彦、大沼一彦、坂東弘之

発行 千葉大学工学同窓会 〒263-8522 千葉市稲毛区弥生町1-33 千葉大学工学部松韻会館内
事務担当 甘利 節子 電話/FAX 043-254-6358(月火木金10時～16時)
E-mail: chiba-u.kogakudosokai@nifty.com

印刷 株式会社サラト 〒670-0948 兵庫県姫路市北条宮の町172番地 電話079-284-1380 FAX079-224-7746